

奄美の地域メディアを俯瞰する：

島外メディア編

—— NHK の奄美番組と奄美映画からのメディア社会学 ——

加 藤 晴 明

『中京大学現代社会学部紀要』 第10巻 第1号 抜 刷

2016年10月 PP. 103~168

奄美の地域メディアを俯瞰する：島外メディア編

—— NHK の奄美番組と奄美映画からのメディア社会学 ——

加 藤 晴 明

1 節 島外メディアとしての NHK

- 〈島外からのまなざし〉による島語りがある
- NHK が放映した奄美番組
- マス・メディアによる田中一村の発見と日曜美術館
- マス・メディアとアマミのクロウサギの子育て発見

2 節 NHK の紀行番組と「新日本風土記 奄美」

- NHK の紀行番組
- NHK 「新日本風土記 奄美」(2015) の位置
- 「新日本風土記 奄美」を読み解く

3 節 奄美が舞台の映画・ドラマ

- 奄美映画とは
- 〈島外からのまなざし〉による奄美物語の 3 パターン

4 節 小括：奄美をめぐる〈表出の螺旋〉の多層性

1 節 島外メディアとしての NHK

- 〈島外からのまなざし〉による島語りがある

「奄美の地域メディアを俯瞰する：テレビ放送・ビジュアルメディア編」

では、群島内におけるケーブルテレビ局や写真・ビジュアルメディア事業をとりあげた。その際に、島内にいる駐在員・記者を通じて取材された報道ニュースが、鹿児島・福岡・東京経由で放映され、島内で視聴される環流の構図があることを指摘した。

地域メディアは、地域内の情報の地産地消であると言われが、奄美を例にとれば、群島内には、〈島内のまなざし〉だけではなく、〈島外からのまなざし〉と共振する回路もある。それを、〈マス・メディアとの接合・共振の回路〉として表現した。

さらに、メディアがさまざまな作品を通じて奄美を語る際には、奄美という地域そのものを直接的に語る場合もあれば、奄美を舞台にして、南の離島・南国・独自文化などのイメージを利用してメディア作品の物語構造を強化する場合がある。そこでも〈島外からのまなざし〉が作動している。こうした外部のメディアによる奄美語りという視点は、狭義の地域メディア論では射程に入っていない。

本稿では、そうした〈島外からのまなざし〉に基づいて奄美を語る島外メディアをとりあげる。極めて当たり前のことだが、地域を語るメディアは、外部にもある。ある意味では、テレビや映画などのマス・メディアの方が、影響力をもって奄美という地域の物語を構築していく。それは、〈島外のまなざし〉であるとともに、全国的に放送・上映されることで〈島内のまなざし〉自体にも影響を与える。さらに、島のメディアと関わることで、島人のアイデンティティ形成に影響を与えたりもする。

繰り返すが、地域の出来事や物語は、東京キー局や県庁所在地の地方局のまなざしによってフレーム化（被写体化・撮影・編集）され、放送される。ニュース、ドキュメンタリーや紀行もの、そして映画・テレビドラマなどが制作され、地域外の人にも公開されていく。地域のメディアを考える際には、この〈島外からのまなざし〉と〈島内のまなざし〉の両方のメディアの存在や関係が意識されなければならない。両者は、分断していることもあれば、フォーマルな制度の中で、あるいは私的・個人的なかかわ

りの中で記事・番組が発信されていくこともある。

「テレビ放送・ビジュアルメディア編」で紹介したように、奄美にはこうしたマス・メディアの出先事業者として、本社・本局といった上位局から直接派遣された社員以外に、現地で採用された特派員・記者がいる。彼らを介して取材された奄美の記事・映像は、奄美から鹿児島へ、福岡へ、さらには東京へと送られて、鹿児島県域・九州域・全国に向けて放映される。台風、事件などの際に、奄美からの映像が送られ、奄美と無縁の一般の視聴者の目にとまることになる。奄美の特派員は、元新聞記者が多いが、そうした記者が月に1、2本のレポート映像の記事とともに鹿児島に送り、多くは鹿児島版の番組のなかで放映されることになる。

こうした奄美→県域→全国域という情報の流れ以外に、奄美の映像（あるいは音声）が、外部の視聴者・観客に公開される流れがある。奄美を舞台にした映画やテレビ番組がそれである。テレビ局・映画といったマス・メディアの企画＝フレーム(まなざし)から奄美が切り取られ、ストーリー化されて公開される。言い方を変えれば、奄美外の文化産業によって、マス・メディアのまなざしによって、奄美が定義づけられていくことになる。それは、一方的にというよりも、奄美に対する原作や制作者の元々の奄美イメージがあり、その奄美イメージをもとに、完成した作品を起点にして新たな改訂版の奄美イメージがつくられていく。それは、島外の視聴者、都市の視聴者を魅了するだけではなく、同時に、奄美の視聴者にも見られることで、奄美の人々自身の自己イメージと交叉することになる。ここからは、反発も起これば、島に対する自己イメージの再定義も生まれる。

テレビに話を絞れば、外部のマス・メディアで奄美を日常的に取り扱うのは鹿児島のテレビ放送局だが、それは同じ県域の出来事ということでの紹介や企画番組ということになる。いわば鹿児島ローカルである。これに対してナショナルなレベルで奄美を語るのが、NHKや民放キー局が制作する奄美テレビ番組である。

●NHK が放映した奄美番組

NHK は開局以来、どれくらい奄美番組を制作してきたのであろうか。NHK の番組の年代記ともいえる NHK クロニクルの中の保存番組で「奄美」を検索すると、245 件の番組が出てくる。鹿児島大学の気鋭の映像文化研究者中路武士氏は、奄美の映像アーカイブス研究の視点から NHK の番組に注目している。

南海日日新聞は、こうした奄美の地域映像アーカイブスという貴重な研究作業を進める中路武士氏の投稿記事を掲載している。

このような地域映像アーカイブスとともに、公共放送である NHK のアーカイブスの映像もたいへん重要だ。2016 年現在、234 本もの奄美に関する映像が保存されている。…番組タイトルや番組内容の記述だけでも言語学的に時系列を追って分析すると、戦後 70 年を通して日本本土が奄美にどのような「まなざし」を向けてきたのかがわかる。
(南海日日新聞、2016 年 2 月 19 日)

奄美での民放放送の開始の遅さを考えれば、この NHK の映像群は貴重な文化資産である。それがどのような変遷をたどってきたのかは、中路氏をはじめとするこれからの研究によって明らかになっていくと思われる。

予見的に考えれば、たぶん「まなざし」は変遷してきたことが想定される。たぶんそれは、奄美のなかで島唄・島口、あるいは奄美の食が目ざされてくる流れと交叉してくるのかもしれない。

中路氏の指摘によれば、NHK の番組の年代によって焦点の当て方、つまり奄美へのまなざし（フレーム＝物語の作り方）が違ってきているという。中路氏からは以下の示唆をいただいた（2016.3.1、南海日日新聞 2016.2.19）。

1950 年代：「日本本土への復帰」がニュース番組で報告されるのみ。

1960年代：「ハブ」の対策、「台風」被害、「貧困」に苦しむ人々の姿が描かれる。

1970年代以降：奄美の番組数の増加、『新日本紀行』シリーズが始まる。つまり、「日本・ふるさと」「伝統・伝承」などのキーワードのもと、奄美の「自然の豊かさ・美しさ」が表象される。

1985：田中一村の発見。『日曜美術館 黒潮の画譜』

2000年代：元ちとせや新孝介の登場。島唄への注目。

中路氏は、奄美へのまなざしが、「社会問題・自然災害を抱えた島」から「大自然に囲まれた南国特有の文化をもつ島」への移行してきていると指摘している。

このように、NHKの奄美番組を振り返れば、〈島外からのまなざし〉による奄美への語りが時代とともに変遷していく過程を垣間見ることができるかもしれない。すでに指摘したように、奄美の人びとの奄美語りは、奄美内部で循環しているのではなく、本土(東京・大阪)の眼差しのなかで、それとの再帰的・螺旋的な循環プロセスのなかでも形成されてくる。

想像されるのは、高度成長までの農事番組・災害番組などの機能的な番組。そして、地方の時代、地域主義や地域学が語られるなかで、失われつつあるなつかしい日本の原風景(原像)として奄美の風土・民俗文化の紹介と称賛。さらに高度情報社会において、逆に仮想化されない・記号化されない本物志向、スピリチュアル・霊性志向としての南島。そうした変遷が予想される。それは奄美で島唄・島ことば・島料理が復興するプロセスと重なるようにも思われる。

少し丁寧に補足しておこう。奄美の島外では、1960年代に奄美ブームがあり、本土の流行歌手によって奄美が歌われる。島のスターであった大島ひろみが1959年(昭和34年)に歌った「島育ち」は、田端義夫が歌うことで1963年(昭和38年)に全国的なヒットとなる。復帰10年の年である。また同年、三沢あけみの「島のブルース」もヒットし、2人は年末の紅白歌合戦に出場している。「島育ち」は、岩下志摩主演で映画化され

ている。こうしたTVや映画を通じて「奄美」は、全国にイメージづけられた。ただ、紅白歌合戦における三沢の着物姿も、銀幕の中の岩下志摩も大島紬姿ではなく、琉装である。つまり、当時の日本にとっては、奄美は、沖縄が返還される前の「南国」(オリエンタル)を代表する表象であったのだろう。

宮田輝が司会し、名瀬小学校の体育館で中継されたNHKの「ふるさとの歌まつり」が1967年(昭和42年)である。そこでは、奄美は南のエキゾチックな島として構成されていた。こうした島外からの奄美イメージを読み解くには、別途詳細な研究が必要であろう。ただ重要なことは、島外において、NHKが最も多く奄美の映像を番組化してきたということである。東京、あるいは大阪、鹿児島のみならず奄美が描かれる。そして、それを奄美の人々も視聴者として受容する。「自然豊かな、独自の文化をもつ、南の島」は、全国の視聴者だけではなく、奄美の人々自身の自画像をも規定してきたのかもしれない。

こうした側面は、地域の情報を地産地消するという狭義の地域メディア論からは抜け落ちてしまう。われわれは〈地域メディアの総過程〉という視点で、ある地域のなかで人々はどのような情報に接し、そして地域の情報をどのように発信・受容しているのかという問いの重要性を指摘してきた。地域内には、地域メディアだけがあるわけではないからである。この視点からも、〈島外からのまなざし〉による地域の情報の発信という情報流があることを忘れてはならないということだ。つまり、“地域の”メディア、あるいは地域をめぐるメディアという広い視点が必要ということである。

ちなみに、写真家の松田幸治氏が写真・編集者・発行者となった『観光ガイドブック：奄美大島～自然と文化～』(南国出版・鹿児島)の1980年版(最新改訂版)には、田中一村もアマミノクロウサギも登場しない。奄美大島のマップに、かろうじて「アマミのクロウサギ」の文字と絵が出ているだけである。1981年に奄美群島観光連盟が出した『奄美群島観光ガ

イドブック』では、奄美の自然の中の「動物・植物」の項目のひとつに国指定天然記念物としてアマミノクロウサギが取り上げられている。「耳が短く毛が黒褐色のウサギ。後ろ足と尾も短く、カラダは普通のウサギより小さい。…生きた化石といわれる。奄美大島、徳之島の山岳地帯に生息するが、夜行性で用心深い動物のため、生態についてはまだはっきりわかっていない。」とあるだけである。田中一村については触れられていない。つまり1980年代初期のこの段階では、〈島内のまなざし〉のなかでは、アマミノクロウサギも田中一村も、重要な文化資源として視野に入っていない。

●マス・メディアによる田中一村の発見と日曜美術館

NHKの番組の功績のひとつに田中一村への着目がある。この忘れられていた画家は、文字通りメディアによって“発見”され全国に流布されることで、全国的規模で脚光を浴びるようになった。

NHKクロニクルの保存番組のなかの田中一村番組を列挙してみると7つの番組があることがわかる。10年間に1~2本であるから、決して多いわけではないが、〈奄美・美術・田中一村〉という定番の記号セットは出来上がっているといえる。

田中一村が逆境のなかで没したのが、1977年(69歳)。この中央画壇に認められず、無名に近かった画家は、南日本新聞やNHKの「日曜美術館」で紹介されたことで“発見”されたといってよい。その記念碑的番組が、1984年12月9日に教育テレビで放映された「日曜美術館 美と風土(2) 黒潮の画譜 異端の画家 田中一村」である。この番組制作に至るいきさつについては、田中を初めてマス・メディアで紹介した南日本新聞記者の中野惇夫が「それぞれの胸に育む『私の一村』」(『田中一村作品集 新版』)のなかで紹介している。

翌一九八〇（昭和五十五）年夏、NHK 鹿児島放送局に在任中の松元邦暉ディレクターが奄美の海の採録で訪れた。その折りたまたま一村の絵が目にとまり、取材を進め番組となった。まず鹿児島の十五分番組で紹介、さらにその秋「九州 80」（三十分）で放映された。そして一九八四（同五十九）年十二月十六日の教育テレビ「日曜美術館」の「美と風土」シリーズで「黒潮の画壇－異端の画家・田中一村」と題しての放送につながった。（中野淳夫、2001、7 頁）

1984 年の日曜美術館の放映以後、たまたま番組をみた NHK 出版の大矢鞆音（おおや・ともね：1938～）の働きかけにより一挙に画集が出版された。翌年の 1985 年に出版された『田中一村作品集～NHK 日曜美術館「黒潮の画譜」』（日本放送出版協会）である。

ただ、田中一村をマス・メディアとして最初に報じたのは、奄美支局に赴任した南日本新聞の記者の中野淳夫である。中野自身が田中との出会いや記事のことを書き記している。

その年（一九七八年）の秋、私は待ちの話題を拾うつもりで、名瀬市大熊にある「奄美焼」の窯場を訪ねた。そこで窯元の宮崎鐵太郎夫妻から、前年の秋亡くなった画家の話聞いた。それが田中一村と出会うきっかけだった。そのときは、すでに亡くなった画家の話が記事になるだろうかと、なにげなく聞き流していた。（中野淳夫、2001、5 頁）

中野は、一村の遺作を見せてもらい話を聞くうちに一村への関心を強め、翌年、ついに南日本新聞地方面のトップに一村の画業と人生と死を記事として載せる（1979、3.13）。一村の死後2年後のその記事は、それでも大島発の大島情報というローカル記事としてであった。

【大島】名瀬市有屋で奄美大島の植物や鳥類を二十年も描き続けた画家が、二年前人知られず異郷の地で六十九歳の生涯を閉じた。画壇から遠く離れ、孤独の人であったため、その画業が知られず埋もれようとしているが、恵まれぬ生活の中で絵筆ひと筋に打ち込んでいた晩年を知る数少ない人たちは、ことし九月の三回忌に「ぜひ遺作展を…」と話し合っている。(南日本新聞、1979.3.13)

NHKの「日曜美術館」が放映(1984)され、NHK出版が出した『田中一村作品集』(1985)をもとにした全国巡回展は百万人近い人を集め、田中一村は一躍脚光を浴びた。この年の5月から9月、中野は南日本新聞に「アダンの画帖-田中一村伝」の連載をしている。この連載は、奄美の出版史に名を刻んでいる藤井勇夫が興した道の島社(鹿児島)から、1986年に『田中一村伝 アダンの画帖』(南日本新聞編集部編)として出版された。これが田中一村の最初の評伝である。一村に関する著作は1980年代はこの2冊があるだけである。

その後、90年代に入り、新版の『アダンの画帖 田中一村伝』が1995年に南日本新聞社から出される(この本は、1999年に小学館文庫から『日本のゴッカン 田中一村伝』として再刊された)。更に、1996年に小林照幸が『神を描いた男-田中一村』を、1997年に加藤邦彦が『田中一村の彼方へ 奄美からの光芒』を出している。その他の出版は、2001年の奄美パークでの田中一村美術館開館時からそれ以降のものである。

こうした経緯を振り返ると、NHK鹿児島放送局のディレクターの松元邦暉が1980年に“たまたま”奄美で一村の一枚の絵と出会い、それから取材を進めたことで、田中一村はマス・メディアによる放送という舞台にあがることになった。番組は、初めは鹿児島放送局の15分番組、そして九州域での30分番組へと拡散され、ついで1984年にNHKの「日曜美術館」へと至る。教育番組とはいえ、この番組によって田中一村の存在が全国民に流布されたのである。このように一村の全国的な発見はテレビ放映

が出版に先行した。

現在田中一村研究の第一人者であり、田中一村美術館開館に向けて尽力した大矢頼音は、NHK 出版で美術書の企画・編集に関わり、「現代日本画家素描集」(全 20 巻：1977~1981 刊行)という空前のヒットを生み出した辣腕の編集者である。この NHK の辣腕美術書編集者が、1984 年の放送を見て、その意義を直観し急遽『田中一村作品集』を NHK 出版から出す。そして、それをもとにした全国巡回展が開かれ、一村の名は見に来た百万人近い人へと拡散していったのである。こうして、田中一村の名は、その孤高の人生をめぐる物語性によって増幅されつつ、奄美イメージを代表する画家として、“日本のゴッホ”や(田中ではなく)“一村”として表象されていく。

ともかく、〈島外からのまなざし〉である NHK の美術番組が契機となり、奄美の文化資源である田中一村が発見され、それはやがて「日本のゴッホ」というオリエンタリズムを彷彿とさせるようなシンボリックな表現で表象化・記号化されていく。それは田中一村をめぐる、1980 年代半ばから 1990 年代半ばに奄美の外と中で起こったひとつのメディア的出来事＝〈メディア媒介的な展開〉だったといえる。

表 1：NHK の田中一村関係の番組

放送日時	番組名	チャンネル
1984.12.09	日曜美術館 美と風土(2) 黒潮の画譜 異端の画家 田中一村	教育テレビ
1989.10.16	黒潮の画壇 ～田中一村の世界～	ハイビジョンテレビ
1995.03.12	日曜美術館 奄美の杜 わが心に深く ～田中一村の世界～	教育テレビ
2002.02.24	新日曜美術館 田中一村・亜熱帯の理想郷 ～立松和平 奄美の旅	教育テレビ
2010.09.12	日曜美術館 田中一村 奄美の陰影	D 教育 1
2015.04.01	みつけよう、美「田中一村“海老と熱帯魚”」	D 教育 1
2015.04.12	日曜美術館「アートの旅スペシャル みつけよう、美」	D 教育 1

※D はデジタル放送

●マス・メディアとアマミのクロウサギの子育て発見

田中一村が、国民的な範域での社会的認知という意味で、まさしく NHK という放送メディアによって“発見”されたとするなら、アマミノクロウサギもまた“発見”である。それは、太古からの生き物としてのクロウサギを育む奄美の太古の森の発見でもあった。NHK の「いきもの地球紀行 奄美大島の森 初めて見るクロウサギの子育て」は、大きな反響を呼び、アマミノクロウサギを一躍全国に知らしめた。

現在、奄美市公式キャラクターの「コクト君」にもなっているアマミノクロウサギは、幕末の薩摩藩士・名越左源太の奄美大島地誌『南島雑話』では、「大島兎」の名で登場する。「耳短くして倭の兎と異なり猫に似る」と説明されている。しかし、地元では 1920 年までは肉が食用とされたり、婦人病の薬になると信じられていたという。1921 年（大正 10 年）に国の天然記念物第 1 号に指定され貴重種として認定されたのだが、ハブの生息する夜の森に分け入ってその生態を調べようという研究者はいなかった。

奄美の最初の市販写真集『奄美の世界』を出版した松田幸治氏によれば、島で撮影に明け暮れた 1970 年代半ば頃は、一部の動物学者にしか関心をもたれておらず、地元の関心もなかったので写真の対象にしようとも思わなかったという（田中一村も同様で、絵のうまい染色工がいるという紹介であったため、観光ガイドブックの表紙挿絵を依頼することもしなかったという）。

そのメディア上のともいえる発見は、別稿で紹介した奄美出身・在住の写真家である浜田太氏存在抜きには語れない。アマミノクロウサギの社会的認知は、NHK というマス・メディアと地域メディアとしての浜田太氏の写真・映像事業との出会いと相互作用のなかで認知が拡散していった好事例である。アマミノクロウサギもまた、オリジナルな文化的苗床が、〈メディア媒介的な展開〉をすることで、国民的な社会的事実として認知＝リアルとなっていったのである。

しかも、表 2 からわかるように、NHK の番組で、〈島外からのまな

ざし) のみによってアマミノクロウサギを撮影して番組にしたのは、最初の「生きもの地球紀行」(1995 年) だけである。それ以降は、地元の写真家である浜田太氏と出会い、浜田氏に依拠するかたちで、あるいは両者のコラボレーションによって番組が成立している。浜田氏は、アマミノクロウサギと出会ってから実に 8 年後にようやくクロウサギの子育ての巣穴を発見している。さらに、1996 年にようやく巣穴の子育ての動画撮影に成功している。この感動的な映像が、その後のアマミノクロウサギの社会的認知に大きな貢献をすることになった。

ホライゾン編集室が編集し、奄美群島観光連盟が発行した『ホライゾン』Vol.2 (1995) では、「奄美民話美術館 アマミノクロウサギとハブのお話」(文: 嘉原カヨリ・写真: 浜田太) が、見開き 2 ページの写真・記事として割かれている。見開き 2 ページの四分の三をしめる写真は、アマミノクロウサギの巣穴からハブが出て来て、アマミノクロウサギ自体が顔を出してくる決定的なシーンの写真である。巣穴の発見は 1994 年であり、その次の年に、NHK は初めてアマミノクロウサギを取り上げて、「生きもの地球紀行 奄美大島 亜熱帯の森にクロウサギが跳ねる」を放映している。さらに、「生きもの地球紀行 奄美大島の森 初めて見るクロウサギの子育て」で放送されたのが 1999 年であるから、最初の出会ってから実に 13 年の歳月を費やしている。

つまり、奄美の文化的資源としてのアマミノクロウサギは、地元の写真家浜田太氏の文字通り人生を懸けたとさえ言ってよい、長年の奄美の森通いによる撮影という営み抜きには、このような形では〈メディア媒介的展開〉がされなかったとさえ言えるのではなかろうか。困難を極めるアマミノクロウサギの撮影は、クロウサギの声なき声を人間社会に伝えたい、「奄美の自然の豊かさや貴重さ」を伝えたいという浜田氏の強いミッションと長年の撮影努力の蓄積の上で花開いている。今日では、誰もが貴重な自然遺産として認知する奄美の森とアマミノクロウサギだが、浜田氏によれば、それに関心を向けることは当時の奄美ではかなり特殊なことであった

という（メール：2016.07.22）。

1980代まで奄美の森はハブがいて一銭の値打ちもないと言われていた時代でしたので山で泊まって撮影など気狂のやることだと言われさげすまれてきました。ですのでアマミノクロウサギの生態などを調べる研究者もいませんでしたし一般の人たちもアマミノクロウサギに興味は持っていませんでした。

でも自分の道はこれしかないと言心に決めて、いつか、NHKの自然番組でやりたいと夢を持って生態解明に取り組んでいました。（浜田太、2016.07.22）

浜田氏の奄美への思いは深い。写真集『時を超えて生きる アマミノクロウサギ』に「奄美大島一森の曼荼羅」というエッセーを寄せた立松和平は、浜田氏について次のように評している。

浜田太さんは生まれ故郷の奄美大島を愛する、根っからの奄美人である。奄美を生涯のフィールドワークの場所と決めた浜田太さんと、奄美大島を旅することは楽しい。…奄美の消えゆくとしている美しい風景やら人の営みに向ける眼差しが限りなくやさしく感じられ、こちらも心がやさしくなるからである。…奄美の自然と人の営みを撮影するのが浜田さんのライフワークであるが、それは奄美人として故郷に生きようという覚悟からくるものだ。（立松和平、1999）

このように、浜田氏のなかには〈島内のまなざし〉が身体化している。しかし同時に、その活動がNHKによる番組という〈島外からのまなざし〉と共振することで注目され拡散した。言い換えれば、アマミノクロウサギの子育て発見は、地元の写真家による〈島内のまなざし〉からの〈メディ

ア媒介的な展開」と、〈島外からのまなざし〉による〈メディア媒介的な展開〉がコラボレーションした好例といえる。それは、まさに〈マス・メディアとの接合・共振〉そのものであろう。いまやアマミノクロウサギは、奄美の森の世界自然遺産登録の貴重な切り札となろうとしている。つまり、〈メディア媒介的な展開〉は、ナショナルな評価の次元から、グローバルな評価へと拡張されようとしている。そして、地域をめぐるメディアの表出の螺旋ともいえる作用＝重層的な〈メディア媒介的な展開〉がその梃子となっているのである。

少し強引なまとめ方をすれば、田中一村とアマミノクロウサギという奄美の文化資源＝メディアコンテンツ資源は、1980年代半ばに一部の先駆者たちによって発見され＝気がつかれ、1995年くらいに開花＝初期の〈メディア媒介的な展開〉を始めた。つまり国民的なスケールでは両者の発見は、この1990年代半ばであり、さらなる展開＝〈メディア媒介的な展開〉は、この二つの資源が繰り返し登場する2000年代に入ってからである。

表2：NHKのアマミノクロウサギ番組と写真家浜田太との関わり

放送日時	番組名（+番組内容）	チャンネル
1986.07	※備考：浜田太 金作原原生林近くの林道でアマミノクロウサギと出会う。	
1994.11	※備考：浜田太 アマミノクロウサギの子育ての巣穴発見（撮影の失敗）する。	
1995.07.10	生きもの地球紀行 奄美大島 亜熱帯の森にクロウサギが跳ねる（※語り：宮崎淑子）	総合テレビ
1996.11	※備考：浜田太 アマミノクロウサギの子育ての巣穴を発見し写真撮影に成功する。	
1998.05	※備考：浜田太 アマミノクロウサギの子育ての巣穴を発見し動画撮影の成功する。	
1998	※備考：浜田太写真集『時を超えて生きるアマミノクロウサギ』出版・小学館	
1998.12.08	※備考：記者発表し、多くのニュースメディアに取り上げられる。	

放送日時	番組名 (+番組内容)	チャンネル
1999.01.04	生きもの地球紀行 奄美大島の森 初めて見るクロウサギの子育て (語り：柳生博) (浜田太写真事務所 HP:「撮影を担当」とある)	総合テレビ
1999.7.21	※備考：絵本「とんとんとんこのこもりうた」 (作・絵:いもとようこ、協力:浜田太) 出版・講談社	
2002	※浜田太 小学館ウィークリー天然記念物シリーズ 「アマミノクロウサギ」を担当。	
2003.06.09	地球・ふしぎ大自然 なぜ生き残った?黒いウサギ 奄美大島 太古の森 (※語り：武内陶子) (浜田太写真事務所 HP:「制作」とある)	総合テレビ
2003.06.09	同上 (再放送)	D 衛星 HV
2005.05.12	知られざる野性アマミノクロウサギ 森に潜む生きた化石 (※放送内容：貴重な映像を紹介する。語り：塚原愛)	D 衛星 HV
2006.04.05	同上 (再放送)	衛星第二テレビ
2007.03.07	ハイビジョン特集 日本人カメラマン野性に挑む 浜田太・アマミノクロウサギ神秘の生態に挑む (※番組内容：奄美在住の動物カメラマン、浜田太さんが、観察されたことすらない謎の生物、求愛や交尾の撮影に挑む。…浜田さんの挑戦を軸に、クロウサギの神秘の生態を解き明かす。出演：浜田太、語り：内田勝康・鹿島綾乃)	D 衛星 HV
2007.05.07	同上 (再放送)	D 衛星 HV
2008.09.02	はろ～！あにまる「九州・沖縄1～アマミノクロウサギ(1)」 (※出演：水樹奈々、野川さくら)	D 衛星 HV
2008.09.03	はろ～！あにまる「九州・沖縄1～アマミノクロウサギ(2)」	D 衛星 HV
2015.06.11	ハイビジョン特集 日本人カメラマン野性に挑む 浜田太・アマミノクロウサギ神秘の生態に挑む (再放送)	DBSプレミアム
2016.02.15	ワイルドスペシャル 「世界の希少な生きものたち 知られざる素顔に迫る!」 (※番組内容：“希少生物の宝庫”奄美大島をアナウンサーが訪れ、地元の動物カメラマンと、日本の天然記念物アマミノクロウサギの撮影に挑戦する。出演：浜田太・久保田祐佳アナ)	DBSプレミアム

※D はデジタル放送、HV はハイビジョン放送

2 節 NHK の紀行番組と「新日本風土記 奄美」

●NHK の紀行番組

NHK は、2016 年に「新日本風土記 奄美」を放映した。現在の奄美の魅力や島で活躍する重要な人物を盛りこんだなかなかの力作である。NHK は、これまでさまざまな紀行・風土記番組を制作してきた。(前述したように NHK クロニクルに盛りこまれた 245 番組の詳細な分析は、これからの世代の奄美研究者の課題であろう。本稿では、「新日本風土記 奄美」に焦点をあてて、〈島外からのまなざし〉について若干の考察を試みる。)

同じ〈島外からのまなざし〉であるとはいえ、新日本紀行時代の奄美の描き方と現在の奄美の描き方には差がある。「新日本紀行 与論島」は、2007 年 2 月 24 日に 39 年ぶりに放送されている。映像では、人々や自然に焦点が当てられ、離島での厳しい暮らしが綴られている。高度成長に取り残された南の離島。独特の文化・風習、そして人々の苦難な暮らし。それが当時の奄美を描く表現の作法であった。

ちなみに、奄美の島唄とメディアの交叉の歴史を振り返ると、築地俊造が日本テレビ主催の第 2 回日本民謡大賞全国大会で日本一に輝いたのが 1979 年、「新日本探訪 島の唄 母の唄」(1993) に登場する坪山豊が、第 1 回奄美民謡大賞(南海日日新聞社)で優勝するのが 1980 年、中野律子が日本民謡大賞で優勝するのが 1990 年、さらに高校生の元ちとせが、最年少で奄美民謡大賞を受賞するのが 1996 年である。

こうした奄美のメディアと文化の交叉の歴史(文化メディア史)を振り返れば、1970 年代はいわゆる〈島外のまなざし〉によって、“日本の辺境”として奄美の自然と暮らしが描かれた時代である。

1980 年代は、〈島外のまなざし〉である日本民謡大賞を通じて、〈島内のまなざし〉のなかで島唄が文化的な地位を上げていく時代。90 年代は、「新日本探訪 島の唄 母の唄」のように奄美の文化としての島唄が若干注目され始める時期といえよう。ただ、90 年代以降も、他の番組タイト

ルをみる限り、漁・長寿・民俗舞踊・祭りなどが並ぶ。

番組内容を検討していないので、タイトルのみからの解釈になるが、2000年代、とりわけ2010年代に入り変化の兆しが顕著になってきている。この時期から、奄美は、現代まで継承された独特の民俗文化、島唄・歌謡曲の盛んな島、そして癒される旅の対象の島、「大自然に囲まれた島」、「南国特有の独特の文化をもつ島」といった、大都市で暮らす人にとっての癒しの対象となるようなオルタナティブな島として表象されていく。その典型的な番組例が、2016年に放送された「新日本風土記 奄美」である。

表3：NHKの紀行・風土系の番組（島唄・歌謡関係の番組を除く）

放送日時	番組名（+番組内容）	チャンネル
1965.11.23	NHK 放送文化財映画 稲霊がなし 奄美の民俗と芸能	教育テレビ
1968.02.26	新日本紀行 与論島～鹿児島県～	
1969.05.05	新日本紀行 奄美の海、初夏～鹿児島県～	
1970.04.06	新日本紀行 永良部花の島～奄美・沖永良部島～	
1972.03.06	新日本紀行 奄美のふる里～加計呂麻島～	
1973.03.12	新日本紀行 南島冬景色～奄美大島～	
1975.01.06	新日本紀行 奄美の歳月～鹿児島県奄美大島～	総合テレビ
1977.08.22	新日本紀行 夏・尼っ子の街～兵庫県尼崎市～	総合テレビ
1978.08.16	新日本紀行 南の島々の物語（1）さんご礁の狩人～奄美・与路島～	総合テレビ
1979.08.16	新日本紀行 黒潮ロマン（3） 碧い道路～トカラ列島往来～	総合テレビ
1986.09.15	南の島の長寿村 ～奄美大島・龍郷町円～	総合テレビ
1989.10.21	日本列島ふるさと発スペシャル 実録・仮面の舞～奄美大島・諸鈍シバヤ～	衛星第一テレビ
1991.07.21	新日本探訪 母たちの応援歌～奄美喜界島～	総合 TV
1993.12.10	新日本探訪 島の唄 母の唄～奄美大島～	総合テレビ
1994.10.09	新日本探訪 “上人（ウンチュ）”が笑った～奄美大島・長寿村の敬老の日～	総合テレビ
1996.02.07	ETV 特集 伝説の名人たちそして男は海になった	教育テレビ
1996.09.18	ETV 特集 老いをふるさとの海で～奄美・待ち網漁～	教育テレビ

放送日時	番組名 (+番組内容)	チャンネル
1997.07.21	ETV 特集 わがヤポネシア私人 高良勉、琉球弧からのまなざし	教育テレビ
1997.11.02	ふるさとの伝承 南島の八月新年・奄美大島の豊年祈願祭	教育テレビ
1998.09.13	ふるさとの伝承 田の神・稲の神	教育テレビ
2005.05.31	九州沖縄スペシャル ウタは海の恵みに生まれ 奄美大島 佐仁・秋名	D 総合1
2008.05.29	民俗記録映画 海上の道 奄美群島 第1部	
2012.12.18	につぼん紀行 島の紅白歌合戦～鹿児島 奄美大島～	D 総合1
2013.07.28	小さな旅 青き海のなか～鹿児島奄美大島～	D 総合1
2013.10.13	のんびりゆったり路線バスの旅「太陽と笑顔につつまれて～鹿児島 奄美大島～」	D 総合1
2016.01.15	新日本風土記 「奄美」	DBS プレミアム

※D：デジタル放送

●NHK「新日本風土記 奄美」(2016)の位置

NHKの番組のコンテンツ分析は本稿の主題ではないが、〈島外からのまなざし〉の典型的パターンを理解しておくという意味で、「新日本風土記 奄美」に分け入っておこう。

表3からもわかるように、NHKでは、これまで奄美についても、たくさんさんの紀行番組・風土紹介番組を制作してきた。そのなかでも、今回の「新日本風土記 奄美」は完成度の高さや〈まなざし〉において、これまでとは違う明確で新しいメッセージ性をもっている。結論からいえば、そこに描かれているのは、「神秘の島」「神の島」としての奄美の物語化である。(このフレームは、加藤晴明研究室の社会調査実習において、6名の参加学生たちと共同で展開した奄美研究プロジェクトの成果として発見されたものである。2015年度実施)

また同時にこの番組は、奄美の魅力要素として、民俗的な要素、神秘的な要素、島の文化運動(島口復興運動の先頭に立つ島のラジオ)と、ある意味では、奄美エッセンス(奄美へのタグ付け)をもれなく盛りこんだ構成となっている。

場組制作スタッフは、エンドロールに掲載されている。

語 り : 伊藤敏恵・中山庸介

撮 影 : 福富 実

ディレクター : 坂本康子

プロデューサー: 伊藤 純

制作総括 : 藤田英世

このメンバーをみると、この番組が、ディレクターもプロデューサーも匠といってよい豪華メンバーによって制作された番組であることがわかる。以下のディレクターとプロデューサーの組み合わせを見れば、ある意味では、日本の最高の文化水準をもつ制作者たちによって制作された番組ともいえよう。

ディレクターの坂本康子は、1969年生まれ。番組制作会社をへてフリーのディレクターへ。NHKでも数々の番組を担当している。『ミステリーの生まれるところ NHK アガサ・クリスティー紀行』の著書もある。2003年には、フジテレビのノンフィクション番組でギャラクシー賞も受賞している。

プロデューサーの伊藤純は、ディレクター&プロデューサーとして数々の名作を手がけてきて名匠といわれている。NHKのスペシャル番組部のチーフ・プロデューサーである。NHKの看板プロデューサーと言われている。第29回 ATP 賞テレビグランプリ 2012のドキュメンタリー部門で優秀賞をとった『巨大戦艦 大和～乗組員たちが見つめた生と死～』などでもディレクターの一人をつとめている。

●「新日本風土記 奄美」を読み解く

この作品は2016年1月に放映された作品である。この放映された時期、奄美、あるいはもっと広く日本にとって南の島（南島）への〈島外からのまなざし〉は、どのような段階にあるのだろうか。

奄美では2014年7月1日から成田空港からの格安航空機が飛び、観光

地として徐々に着目されだしている。しかし、この作品がそうした奄美への観光客を意識してということでもなさそうだ。

確かに、以前に比べて、奄美のメディア露出は高くなっている。沖縄が頻繁にメディアで紹介され過ぎてしまって、沖縄番組で映像化されないものの、沖縄が失ってしまったもの、そうしたものを奄美に求める旅行者も少なくない。(われわれも、奄美の居酒屋で、沖縄に行き尽くして、奄美にたどりついて一人旅の女性と出会ったことがある。この女性は、次の日、紹介したユタ神様のところに飛んでいって、人生相談をしたらしい。後日、結婚したとのメールがきた。)

この作品で取り上げられて奄美のシーンは、以下のような12のコーナーによって構成されている。

- ①「導入部」平家の落人伝説から始まり民俗文化紹介のクリップ、とりわけショチョガマ
- ②「島の豊作祈願」秋名集落の重要無形文化財であるショチョガマ・平瀬マンカイ
- ③「小さな島のラジオ局」あまみエフエム・島ことば・パーソナリティ渡さんとおばあ
- ④「日本一土俵の多い島」浦上地区の青年団の活動、相撲大会
- ⑤「南の島の源平合戦」諸鈍シバヤ、ミキづくり、実久三次郎、石垣から来た家族
- ⑥「山は恩人」西安室でのソテツ粥づくり、南島雑話の挿絵
- ⑦「大島紬」写真・古い映像のみ
- ⑧「放浪の唄者」盛島貴男氏・音楽スタジオ・琴づくり、里国隆
- ⑨「島唄の心」朝崎郁恵さん、花富での幼なじみとの交流、父の作った嘉義丸の歌、諸鈍での歌掛け
- ⑩「近所の“生き神様”」鶏飯づくり、ユタ神と来客、みそぎ場所
- ⑪「ご先祖さまがやってくる」村田裕子さん、先祖供養の準備、阿室の先祖供養、古い衣装の虫干し

⑫「月あかりの下で」小湊集落、十五夜のための稲刈り縄作り、十五夜
①は以後の映像のクリップを使った導入部、⑦は写真・古い映像のナレーション語りのみであるから、実質的に取材による内容は、10のコーナーから構成されているといってよい。

表 4：奄美の映像の記号分析枠

表象としての奄美	象徴としての奄美
説明：奄美的な記号、地域表象などのこと、奄美らしさの具体例	説明：記号が作りだしているイメージ、奄美らしさの抽象的な中身、記号が描くシンボリックな世界、あるいは記号に含まれている文化的価値など
【言語表象】 ①森/落人/文化/不思議な/言い伝え/神様/先祖/禱り/唄/心/あたたくなる/南の海/別天地 ②独特の風習/旧暦/田んぼ/儀式/お供え/海/かなた/神様/感謝/南の島/教え ③ラジオ/島口/太陽/伝統/暮らし/あんま/昔 ④土俵/行事/青年団/お披露目/まわし/壮年団/先輩/後輩/ (松たか子の語り) 命/唄/出会い ⑤神宿る島/神様/平家/落人伝説/平資盛/おみき/源氏/実久三次郎/手を合わせ/ありがたい/神屋敷/神聖な場所/都の文化/交流/神宿る/南の島 ⑥神山/神聖な場所/ソテツ/命/つながり/苦難の歴史 ⑦大島紬/奄美の風土/日本を代表/絹織物 ⑧放浪/唄者/自由人/特別な琴/放浪の唄者/里国隆/盲目の唄者/島に帰り/助け合う/わち合う/貧乏	どんな島としてイメージされるかを列挙してみる。  旧暦の島 儀式の島 独特の風習の島 神様の島 感謝の島 南の島 ラジオの島 島口の島 太陽の島 あんまの島 土俵の島 行事の島 先輩・後輩の島 命 唄 出会い 神宿る島 伝説の島 神聖な場所 南の島 神山の島 命の島 苦難の歴史の島 大島紬の島 風土の島 唄者の島 助け合いの島 貧乏の島 心をつなぐ唄の島 唄の島 唄のふるさとの島 ユタ神様の島 神高い島 先祖代々の島 先祖を迎える島 神様をお迎えする島 神様の島

表象としての奄美	象徴としての奄美
⑨朝崎郁恵/心/唄/唄のふるさと/三味線/暮らしの中/集まれば唄/何気ないやりとり/心を伝え/ご先祖さま/心をつなぎ ⑩郷土料理/鶏飯/ユタ神様/死者の言葉/霊能者/身近な/神様/神が息づいている/神高い ⑪先祖/迎え/風習/お供え物/先祖代々/神々しく/ ⑫神事/お月様/迎え/神様/厄払い/昔/行事/お年寄/祈る/心/清める/海 【ビジュアル表象】 ①大島海峡/ヒカゲヘゴ ②ショチガマの準備/お供え/着物姿の女性/赤飯/海/彼方/神様/ショチョガマ/六調踊り ③ラジオスタジオ/市場/島口番組/パーソナリティ渡さん/おばあの家 ④土俵/まわしをつけた子供たち/浦上青年団の紅白のまわし作り/壮年団とのやりとり ⑤大島海峡/諸鈍シバヤ/平家/落人伝説/実久の女性/実久三次郎の墓/諸鈍シバヤ/石垣から来た家族 ⑥ウナギ/ソテツの切り出し/ソテツ粥づくり/南島雑話の挿絵/ソテツかゆを食べる ⑦大島紬の模様/製作の写真・映像 ⑧盛島さん/音楽スタジオ/琴づくり/里国隆の写真 ⑨朝崎郁恵さん登場/幼なじみとの会話/浜での唄かけ遊び/浜に立つ朝崎 ⑩栄さんの鶏飯づくり/ユタ神と来客のやりとり/ユタ神のみそぎ場と語り ⑪お供えの準備/玄関にお供え/阿室集落のお迎えの踊り/古い衣装の虫干し ⑫小学生の稲刈り/縄づくり/十五夜の行事	行事 祈る島 心清める島

表象としての奄美	象徴としての奄美
【サウンド表象】 朝崎郁恵さんのテーマ曲「ゆふあがり」 八月踊りや踊りや諸鈍シバヤの音風景 ラジオの放送シーン/おばあの語り(島口) 黒人霊歌 盛島さんが唄う「よいすら節」 朝崎さんの幼なじみが歌う「嘉義丸の歌」	

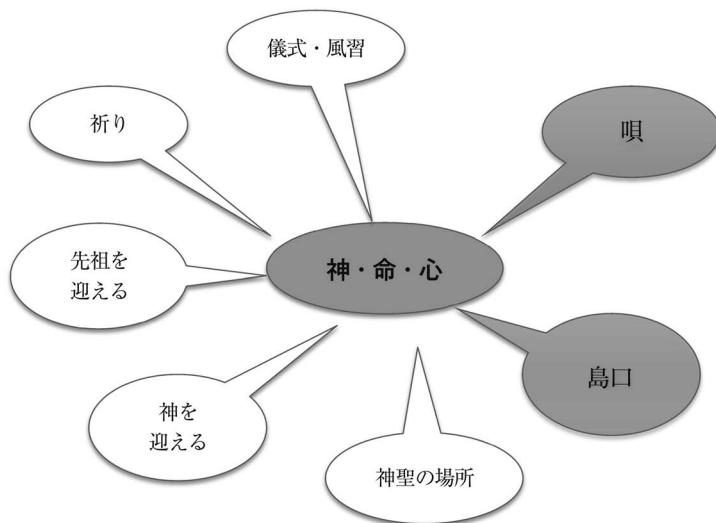
こうして表現された記号を突き合わせながら、より抽象的な要素を抽出するという作業の過程で浮かんでくるのは、奄美を豊かな精神世界をもった島として描く制作者の表現の仕方である。奄美の精神世界は、いわば奄美の文化の基盤・土台であり、個々の具体的な民俗文化（文化的行為）の起点として位置づけられている。

つまり、「新日本風土記 奄美」は、他の「新日本風土記」が、どちらかといえば、風土を土壌にして、その土壌の上で生きる人々のドラマが描かれることが多いのに対して、各コーナーでの人々の映像クリップを通じて奄美の精神世界の魅力が、静かにしかし力強く語られるような構成になっている。

ひとことで言えば、「新日本風土記 奄美」では、奄美は、「神」の島として描かれている。故郷（ふるさと）という魅力要素もたくさん盛り込まれているが、「南の島」である奄美が独特なのは、そうした故郷的要素も神様と結びついて描かれていることである。

この描き方は、河瀬直美の映画「2つ目の窓」が「神の島」として奄美をシンボリックに描いたのと似ている。そして、これまでの南島イデオロギーやオリエンタリズムというまなざしよりも、都市化した現代社会やデジタル化した現在社会へのカウンターという配置の中で、癒しの島や精神世界の島という描き方が前面に出てきているように思われる。

【図 1：映像の中の奄美エッセンスの配置図】



われわれが奄美研究を始めた 2008 年以降をみても、奄美の書店に奄美のユタ神様の本が増えている。都市のまなざしという〈島外からのまなざし〉にとっては、奄美の固有の文化（うた・食・クラフト）も重要であるが、それらの文化のアイテムは、単なる郷土アイテムではなく、より象徴的で神秘的なものでなければならない。それが「神の島」奄美であり、その周辺にそれを媒介する具体的なアイテム（それもメディアといってもよい）として配置されている儀式・風習の数々である。無形民俗文化財としての祭り、先祖崇拝の行事、神事としての相撲、先祖の迎え、墓への祈り、神聖な場所、そして歌いつがれてきた島唄や島口などである。

あまり明解な図ではないが、図 1 で示したように求心に神をおき、その他の奄美エッセンスを周辺に配置することで、奄美の精神世界が描かれていく。この神を補完する言葉が、「命」と「心」である。「神」、「命」、「心」といった抽象的で象徴的な要素が中心核に来て、その周りに具体的な民俗文化（民俗的行為）の諸様相が配置される。

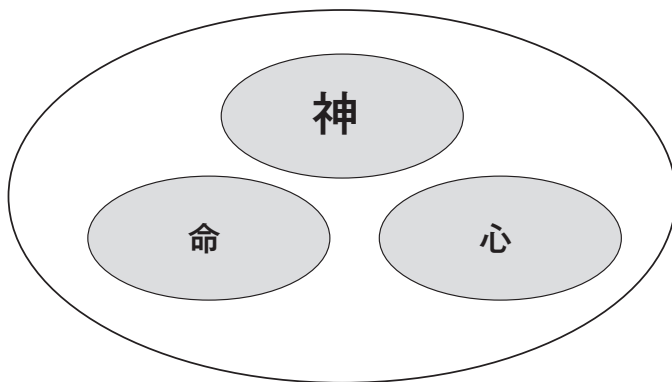
その諸様相もとりあえず、2種類に分けておこう。

グループ A：儀式・風習・行事である。祭り、相撲、先祖迎えのお供え、神様の迎え、場所への祈りなど

グループ B：唄、島口、食、クラフト（大島紬）など

そのなかでも、唄はまた、心の歌、命の歌、神の歌のように特別な地位を占めるように描かれている。実際、奄美の島唄に詳しい人々の間では、朝崎郁恵の島唄は、奄美で通常唄われている生活のなかの島唄というよりも、ノロ唄・神唄に近いと位置づけられている。朝崎のおどろおどろしい発声の島唄は、東京・都心でジャズなどとコラボすることで、都市の高学歴の文化消費者に受け入れられてきた、それは、放浪の唄者と言われた里国隆も同様であろう。朝崎郁恵、里国隆の島唄は、都会の高学歴・知的消費者に、その物語性とともな受容されてきたからである。こうした神歌への志向も、この番組を制作した匠といわれる NHK のプロデューサーや、ギャラクシー賞に輝く女性ディレクターの〈島外からのまなざし〉の表出といえよう。

【図 2：奄美の精神世界の核心】



3 節 奄美が舞台の映画・ドラマ

●奄美映画とは

沖縄映画があるように、奄美映画というものがある。正確には、奄美がテーマや舞台になる作品であり、その「奄美のシーン（ロケ地が奄美であるか否かを問わず）が物語のなかで登場人物にとって、あるいはストーリーにとって、あるいは作品のメッセージにとって重要な意味を持つ作品」と定義できだろう。

沖縄映画については、世良利和『沖縄劇映画大全』（2008）という優れた紹介本がまとめられている。世良は、沖縄映画を「何らかの意味で沖縄がテーマや舞台、あるいは物語の背景となっている作品」と定義している。ただその大半は島外者・島外資本という〈島外からのまなざし〉によって制作された映画である。この点について世良は、「日本映画」と比較しながら「沖縄映画」の特徴について次のように語る。

しかし「沖縄映画」の場合は事情が異なる。たとえば「沖縄がテーマや舞台になる映画」の大半は、本土の監督やスタッフ、俳優によって制作された本土資本の作品だ。使われる言葉も本土の共通語が基本で、沖縄側から見れば違和感のあるケースも少なくない。逆に「監督や主なスタッフ、俳優が沖縄出身で、沖縄を描いた地元資本によるウチナーグチの作品」と厳密に定義すると、その数は極端に少なくなる。（世良利和、2008、4 頁）

世良は、戦前・戦後の劇映画まで遡りながら沖縄の映画について詳細な資料を紹介している。その中で『男はつらいよ 寅次郎 ハイビスカスの花』（1980）を最初の作品として、1980 年代に沖縄が「癒やしの島」「望郷の島」として沖縄が描かれていくことを指摘する。

そして本土から来た主人公たちが沖縄で何かを見つけたり、誰かに出会ったりして成長し、美しい南島の自然と人情に心癒されるというパターンは、この八〇年代を通して定番化される。…『メイン・テーマ』(八四)では、…ただし映画自体は万座ビーチホテルとタイアップし、そのリゾート地としての魅力を全面的に描く露骨な観光PR映画だった。『マリリンに逢いたい』(八八)は、…東京で結婚の準備を進めていた女が座間味の美しい海に心癒され、島の若者に心惹かれていくという内容だ。(世良利和、2002、42頁)

厳密な意味での奄美映画、つまり世良の表現を借りれば、「監督や主なスタッフ、俳優が奄美出身で、奄美を描いた地元資本の島口の作品」といったものはない。ひとつの例外は、龍郷町教育委員会・郷土教材映画制作委員会が企画・制作した『愛加那 浜昼顔のごとく シマの心、受け継ぐ強さ』である。西郷隆盛生誕180年を記念して2007年に制作された郷土学習用の映像作品である。DVDパッケージには、次のような説明がある。

西郷隆盛の妻であり、西郷菊次郎の母である。奄美大島龍郷出身の愛加那の生涯を振り返り、明治維新を為した西郷隆盛の志、身体的なハンディキャップをものともせず社会に貢献した西郷菊次郎の郷土と母への想い、彼らを支え続けた愛加那の愛情とたくましく生きる姿を映像化し子供たちの愛郷心や生きる指針となるように制作しています。

こうした郷土教育用の作品は例外として、わかる範囲で奄美映画・テレビドラマをまとめてものが表5である。(奄美が重要な舞台になっているもの、原作に奄美の作家がからんでいるものなど、少し範囲を広くとって発表した。)

表 5：奄美映画・ドラマ

公開年	タイトル・番組名・説明	ロケ地	制作
1956	怪傑耶茶(やちゃ)坊 (前・後編)	静岡県松崎町	日活
1960	エラブの海	沖永良部島他	日本映画新社
1963	島育ち	喜界島	松竹大船
1965	ぜったい多数	不明	松竹大船
1968	神々の深き欲望 (※奄美出身の 安達征一郎の小説が原作のひとつ といわれている。)	南大東島・ 波照間島	今村プロダクション
1971	儀式	与論島	創造社 ATG
1973	青幻記・遠い日の母は美しく	沖永良部島	青幻記プロダクション
1990	死の棘	加計呂麻島	松竹
1993	きこばたとん	沖永良部島他	鹿児島テレビ他
1995	男はつらいよ 寅次郎紅の花	加計呂麻島	松竹
1997	虹をつかむ男 南国奮斗編	奄美群島	松竹
2004	島の唄 Thousands of Islands	奄美群島	制作委員会
2004	フーチャ〜旋律の彼方へ〜	沖永良部島	KAERU CAFE
2006	アダン	奄美大島	作る会
2007	めがね	与論島	めがね商会
2007	ジャッジⅠ Ⅰ 島の裁判官 奮闘記	奄美大島	NHK 総合
2008	ジャッジⅠ Ⅱ 島の裁判官 奮闘記	奄美大島	NHK 総合
2009	余命	加計呂麻島	制作委員会
2013	島の先生	加計呂麻島	NHK 総合
2014	2つ目の窓	奄美大島	WOWOW 他

●〈島外からのまなざし〉による奄美物語の3パターン

既に指摘してきたように、島外メディアによる奄美語りは、場合によっては国民的な規模で奄美イメージを形づくる。ニュース番組のなかでの個々のトピック話題だけではなく、映画やドラマは、強い物語性、メッセージ性をもってそうしたイメージを形づくることになる。奄美イメージをめぐる内容分析は、本稿のメイン課題ではないが、〈島外からのまなざし〉の理解の補助線として、奄美映画・ドラマの物語構造についても簡単にふれ

ておこう。

NHKの「新日本風土記 奄美」の項目でも触れたように、加藤晴明研究室では20015年度の社会調査実習として奄美の映画を物語構造の分析を試みた。参加学生6名(調査時3年生)との共同視聴と討議を繰り返すなかで、奄美映画・ドラマに共通の物語構造を析出した。

基本にあるのは、奄美に来島することによる〈再生の物語〉の構造である。再生は、〈救済・再生〉と理解してもよい。さらにその救済と再生には三つのパターンあることがわかった。(A) 人生の再スタート、(B) 命の継承、(C) 成長である。

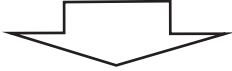
そもそもこの〈救済・再生の物語〉という構造は、インターネット普及期にしばしば制作されたネット恋愛の物語構造と酷似している。ネット空間というアナザーランドを入口にして、そこでの偶発的な出会いにより、いまある制度的自己から解放され、ほんものの自己と親密さに出会い人生をやり直すという物語構造である(加藤晴明、2001、2012)。

ネット恋愛においては、メディア空間での異質な他者との偶発的な出会いが、自己の再生の転機であった。奄美映画・ドラマでは、このメディア空間が、南の島に置き換わる。南の島自体がメディア(※加藤晴明は、メディアを「自己を仮託する文化装置」と位置づけてきた。2012)となり、そのメディアとの出会いが“人生の転機”となり新しい自己が生成・再生していく。

◎奄美と対比されるネガティブな世界

奄美(南島)と対比される現代社会のネガティブが設定される。それは、①文明・開発の世界、②都市の世界、③仕事の世界である。主人公は、そうした世界から離れ、奄美に来島・帰島することで、奄美の魅力要素、つまり〈奄美エッセンス〉と出会う。そしてそれが“人生の転機”となる。

表 6：奄美映画・ドラマの物語構造（奄美物語の構造）

（奄美と対比される）現代社会のネガティブ		
文明・開発の世界	都市の世界	仕事の世界
未開（奄美）に対する文明世界や、開発者が想定されている。	都市的な世界が想定されている。そこでは、社会問題・いじめなどの学校問題・家庭問題などが満ちている。	多忙な仕事の世界が想定されている。他方では、ビジネスの可能性が広がる世界としても描かれたりする。
作品例： 神々の深き欲望等	作品例： ジャッジ、島の先生、男はつらいよ、又吉等	作品例： めがね、2つ目の窓等
 来島・帰島 奄美の魅力要素＝〈奄美エッセンス〉に会い、それが〈人生の転機〉となる。		

再生の物語（救済と再生）		
物語パターン 1	物語パターン 2	物語パターン 3
人生の再スタート	命の継承	成長
人がこれまでの人生をやり直す。人生の敗者復活戦＝リベンジが可能となる。	生命の神秘が宿る島で、命が次の世代に引き継がれていく。	少年や若者が、幼さから脱皮し、人として成長していく。 性的にも大人になる。
作品例：死の棘、ジャッジ、島の先生、男はつらいよ、神々…、めがね等 ※ただ、神々…は、さらに逆転して、開発の逆襲が待っている出口のない物語構造をしている。	作品例： 余命、2つ目の窓のヒロインなど	作品例： 2つ目の窓の主人公など

◎救済と再生の物語構造

- (A) **人生の再スタート**：主人公がこれまでの人生をやり直す。いわば、人生の敗者復活戦。
- (B) **命の継承**：生命の神秘が宿る島で、命か次の世代に引き継がれていく。
- (C) **成長**：少年や若者が、幼さから脱皮し、人・性として成長していく。

奄美映画・ドラマのなかでは、奄美はこうした人生の再スタートをするほどに魅力ある島として描かれる。もちろん、奄美は自然の多様性・希少生物の宝庫という側面があるが、映画・ドラマは人間の物語（ドラマトゥルギー）である。その意味では、自然は島らしさの背景とならざるをえない。主人公にとってその島がどのような象徴的な存在として映るのか、受け止められるのか、そのことで主人公の行為がどう変化するのが重要な構成要素となる。こうした奄美の物語構造のなかでは、奄美の魅力エッセンスもまた三つのパターンをもって描かれる。

- (a) **神秘の島**：神・森・海・性が重要な要素となり、シャーマン（神様）の祈り、祈りのある暮らし、太古の森、人を圧倒する台風の海、荒ぶる性、そうした神秘的な自然、聖なるもの、超越的なものへの畏敬が満ちた島として描かれる。
- (b) **故郷の島**：なつかしい日本の原郷、つまりふるさととしての奄美。素朴な暮らしと人々の濃密なつながり、そして自然と共生する豊かな民俗文化。そこでは、現代社会が失った日本の原像（オリジン）＝ふるさとの情景が描かれる。
- (c) **南国の島**：都会人が空想する抽象的な南の島。具体的な民俗性や固有性を消去し、抽象的で、空想として描かれた架空の南の島。与論島を舞台にした映画『めがね』に描かれたのは、そうした典型的な南国の島である。ある意味では南国は、奄美、ハワイ、沖縄、バリでも構わないことになる。

表 7：奄美の魅力の描き方（奄美魅力の 3 パターン）

奄美魅力を描写く 3 パターン ※各作品が、奄美を「どんな島」として描いているのか。		
神秘	故郷（ふるさと）	南国
奄美を神秘的の島として描く物語の構造。具体的には、神・森・海・性（野性）が重要な要素となる。シャーマン（神様）の祈り、祈りのある暮らし、太古の森、台風の家への畏敬、荒ぶる性	なつかしい日本の原郷、つまりふるさととして描く物語の構造。素朴な暮らしと人々のつながり、そして自然の共生する豊かな民俗文化。そこには現代社会が失った日本の原像＝ふるさとの情景がある。	都会人が空想する抽象的な南の島。具体的な民俗性や固有性を消去し、抽象的で空想として描いた架空の南の島。「めがね」に描かれたのは、そうした典型的な南国。奄美、ハワイ、沖縄、バリでも構わない。
表象： ユタ、ノロ、神社、祭事、深い森、台風の家、奔放な性、命宿る静かな海	表象： 島唄、島料理・島野菜、相撲・結、青年団、壮年団、海、おばあ	表象： 静かな海、健康的な料理、のんびり時間、スローライフ、たそがれ、めがね
作品例： 神々…、2つ目の窓、余命 新日本風土記	作品例： ジャッジ、島の先生、男はつらいよ、又吉…、死の棘 新日本風土記	作品例 めがね

4 節 小括：奄美をめぐる〈表出の螺旋〉の多層性

〈地域メディアの総過程〉という視野に、奄美映画のような〈島外からのまなざし〉にもとづくメディアまでを包摂しようとする場合には、われわれがこれまでの研究で〈表出の螺旋〉と呼んできた概念もより多層化して考える必要が出てくる。フェーズ＝位相という言葉をつくって奄美語りの多層な構造を整理してみよう。

〈表出の螺旋の第 1 位相：島の情報メディア〉

奄美には、実に多くの地域のメディアがある。印刷媒体から放送媒体、

そしてネット媒体まで、奄美を語る文化装置としてのメディアが溢れている。奄美は島を主語にした自己語りメディアに満ちた島である。こうした各種の情報メディアも相互準拠しながら表出の螺旋を形成する。

〈表出の螺旋の第 1.5 位相：外部ネットワーク〉

しかも、奄美内には、全国紙の記者、全国放送の通信員もいる。本社から派遣されてきた記者もいるが、地元で雇われた元地元新聞の記者など多い。つまり地域内だけで閉じた情報・人ネットワークのなかだけで奄美情報が発信されてきたわけではない。外部との開放的なネットワークのなかで、メディアによる表出の螺旋の位相は形成されてきた。情報の配信も含めて、奄美のメディア企業は外部のメディア企業とも繋がっている。

〈表出の螺旋の第 2 位相：文化活動〉

さらに、その広い裾野は、単なる情報メディア（いわゆる媒体）に留まらない。もっと多様な文化活動をつうじて奄美の文化は語られ伝承・創生されてきた。地元のメディアはそうした地域のなかの文化実践と大会などのイベントを通じて相互連鎖的な関係をもっている。これもひとつの表出の螺旋の位相である。

〈表出の螺旋の第 3 位相：島外メディア〉

そして、ヤマトからのまなざし、東京からのまなざし、マス・メディアからのまなざしといった〈島外からのまなざし〉による奄美語りの位相がある。島外メディアの位相である。この〈島外からのまなざし〉による奄美の描写＝奄美語りは、映画・番組のジャンルとしては、奄美だからということよりも、ヤマト・東京とのオルタナティブ（代替）の“ひとつ”として奄美が位置づけられていく。

当然のことながら、〈島外からのまなざし〉による奄美語りは、奄美に生きる人々の固有の文脈に依拠した奄美人の語りつまり奄美の文化や奄美人としてのアイデンティティの固有性にこだわる奄美の人による奄美語りとは異なる。〈島外からのまなざし〉には、東京（あるいは大阪）とマス・メディアが一体となって成立している日本のマス・メディア産業の特性、

つまり東京一極集中の特性が色濃く反映されていることになる。〈島外からのまなざし〉は工業化・都市化・均質化した都市文明に対するアンチとしての“日本の原郷”、(より極私的な“私の原郷”かもしれない)を探し求める。そうした原郷探しの最右翼が辺境である。奄美、下北、能登、、、そうした辺境に焦点が当てられるのは、かつての九学会連合の調査対象設定と似ている。

そして繰り返し指摘してきたように、このヤマトからのまなざし、東京からのまなざし、マス・メディアからのまなざしは、逆に奄美の人々の奄美イメージさえも形づくっていく。なぜなら、奄美で視聴される日常のテレビは、東京発・大阪発・鹿児島発しかないのだから。奄美の人自身がつくる奄美映画、奄美映像はないといってもよい。(一部ケーブルテレビが、イベント中継番組、ニュース、地元紹介の娯楽番組を、限られた加入者に放映するだけである。)

しかし、そうした奄美をテーマや舞台にした番組は奄美の人々と関係なしに作られるわけではない。番組は、島の人々との出会いや人ネットワークといった相互作用のなかでつくられる。

こうした〈島外からのまなざし〉と奄美の人々との相互浸透的で再帰的な関係(再帰的=ブーメランのように自分に立ち返ってきて、物事のプロセスが自覚的・自覚的に展開していくこと)もまた奄美語りをめぐる“多層な”〈表出の螺旋〉を形成していく。かつて戦後から高度成長にかけてのNHKのラジオ・テレビでの農村番組は、通信員制度があり、地方局に派遣されたNHKの記者自身が、そうした人々とのネットワークのなかで成長しながら番組を作成した。また本局に戻った後にも、そこでの経験がライフワーク的に作品づくりに反映されたとされる。

本稿で紹介した田中一村の発見は、鹿児島のNHKのディレクターが仕事で奄美に入り、そのなかで“たまたま”一村の絵に出会ったことが起点である。一村を世に出した一人である南日本新聞の中野惇夫の場合は、“たまたま”取材で訪れた陶芸家との会話という相互作用のなかで一村と出

会っている。

“たまたま”であったとしても、そこにはこのように奄美への来島や島の人々との相互作用があったことになる。奄美という離島に、中央画壇から見捨てられた孤高の画家がいて、無名のまま世を去っていった。一村の人生のそのものの物語性が、やがて「日本のゴッホ」という記号を生みだしていく。

南海の離島にたどり着いた孤高の画家の物語は、メディアを媒介にして、一村と直接接することのなかった多くの奄美の人々にとっても驚きの“発見”だったのではないだろうか。

生前の田中一村は、奄美でも画家として決して高い評価を得ていたわけではない。近所の魚屋の魚を凝視しデッサンする、いつも白い足袋をはき、姿も風変わりな、しかし高貴さを崩さない、奄美の民俗よりも自然だけに関心を向けた、地元で溶け込まない画家だった。しかし、その一村を支えたのも、奄美の人々だったのだ。一村の晩年、彼を支える地元の人々によって個展の企画がもちあがってはいるが、生前、一村の絵が一般の奄美の人々に展示されることはなかった。遺作展が開催されたのは、死後2年後の1979年である。11月30日から中央公民館2階ホールで3日間開催された遺作展には、三千人を超える市民が詰めかけたという。これが一村と一般の奄美の人々の最初の出会である。

惜しいのは、大島紬の図柄を作成したいという一村が望んだ願いが、地元の理解が得られず実現しなかったことかもしれない。それもまた、地元での生前の一村の位置価値を物語るエピソードである。

繰り返すが、田中一村の国民的な“発見”は、NHKのメディアが起点となっている。〈島外からのまなざし〉は、地元の人も気づかないものを気づかせ、すぐ隣にすごい画家がいたという奄美の価値の再発見という新たな〈島内のまなざし〉へと螺旋的に拡張していく。〈島外からのまなざし〉をもつ島外メディアもまた、奄美語りの文化装置なのである。

また、同様に、アマミノクロウサギの場合には、〈島内のまなざし〉が

しっかりとあり、それが〈島外からのまなざし〉とコラボすることで〈メディア媒介的展開〉が積算され、アマミノクロウサギの国民的発見・拡散へと繋がっている。前述したように、浜田太氏という写真家のこだわりが、その貴重な子育て映像が、アマミノクロウサギの社会的・国民的認知に大きく貢献したことは確かである。アマミノクロウサギの子育て発見は、地域内のメディア事業と地域外のメディア事業が共振することで、つまり〈マス・メディアとの接合・共振〉が作用することによって国民的視線での発見となった。その共振によって、チーム浜田ともいえる浜田夫妻のプロジェクトが、奄美語りの一層強力な文化装置として作動した好例である。

〈島外からのメディア〉である映画やテレビ番組の場合でみれば、「2つ目の窓」の監督である河瀬直美は奄美三世として奄美との深い関わりを自称している。「又吉直樹島、島に行く 母の故郷～奄美・加計呂麻島へ」の又吉直樹は、奄美二世である。「ジャッジ」は、NHK 大阪放送局が制作している。関西は、尼崎を中心に奄美出身者が多いところである。あるいは、ディレクター・カメラマンは、現地の取材なかで島の人々と交流したことが想像されよう。

実際、奄美出身の研究者からみても、NHK の裁判官ドラマである「ジャッジ」は奄美のリアリティを描いていると評価されている。その意味では、『ジャッジ』は〈島外からのまなざし〉のなかでも、奄美を神秘・故郷・南国という形ではストレートに描いていない物語ではある。それでも、奄美での家族の暮らしと交流により、家庭の崩壊から免れ家庭が再生していく物語となっている。奄美は、主人公の家族にとって第二の故郷となっていることが描かれているので、故郷魅力の物語でもある。

もちろん、映画・ドラマの描き方、コンテンツの語りとは基本的に制作者の裁量（独我的裁量）に委ねられている。ただ、その独我的ナラティブは、その前段で島という対象から影響も受けている。つまりヤマトと大都市とマス・メディアといった〈島外からのまなざし〉が、奄美と無縁に一方的にあるのではなく、そのまなざし自身が、奄美からの影響のなかで映

像作品の作り手のイメージが形成されている。他方で、そのまなざしは、ヤマト・東京・マスコミ人としての職業的なまなざしのなかに吸収されて、独我的・創作的まなざしを形成することで作品となる。

そして繰り返し指摘してきたように、〈地域のメディア〉という視点から重要なのは、そうした奄美との相互作用のなかで作られた作品が、奄美の人にどう受け取られるか。奄美の人自身の自己イメージ形成にどうインパクトをもつのかという点である。

つまり、従来の地域メディアという視点は、どうしても地域にあるメディアからの情報発信に限定され、そのすばらしい事例探しというフレームが当てはめられる。しかし、その地域の人の地域語りは、他方で、マス・メディアの作品との対話のなかで形成されるという再帰的な語りのプロセスを含んでいる。地域メディアが地産地消という内部循環型の情報の流れだけではない側面をもっている、そのことだけは留意しておく必要がある。繰り返すが、われわれが地域メディアではなく、〈地域のメディア〉という広義の地域メディア論を強調するのもそのためである。

こうした奄美語りの螺旋的な構図は、実際のところ検証は難しいだろう。しかし、地域の情報の流れは、そうした島の内と外をつなぐ二重の回路をもっている。しかもその回路は直接的（制作プロセスにおける内と外の再帰的關係）であり、また間接的（作品受容をとおしての再帰的關係）であるような、多層な螺旋的・拡散的な構造をもっている。まなざし間の関係におけるこの二重性を忘れてはならない。

■付記

- (1) 本稿は、科学研究費（基盤研究C）、研究課題名「奄美における文化の〈メディア媒介的な伝承・創生〉とアイデンティティの再生の研究」（課題番号：16K02345）研究代表者：加藤晴明（中京大学）、共同研究者：久万田晋（沖縄県立芸術大学）、川田牧人（成城大学）、研究年：平成28年度～30年度、に基づい

た研究成果の一部である。

- (2) 本稿のベースとなっている奄美映画の分析は、本稿の中でも触れたように、中京大学加藤清明研究室が実施した 2015 年度の「社会調査実習」の成果にもとづいている。参加メンバーは、指導教員の加藤清明の他、石山香穂、板倉佑奈、上原涼香、川村響、田保里咲子、林真美の六名（全員が調査時3年生）である。奄美映画・ドラマの物語構造は、全員の共同作業のなかで抽出されたフレームである。

■参照・参考文献

- 浜田太（1999）『時を超えて生きる アマミノクロウサギ』小学館
南日本新聞社編（1995）『アダンの画帖』小学館
南日本新聞社編（1999）『日本のゴッガン田中一村伝』小学館
NHK 出版編（2001）『田中一村作品集 新版』NHK 出版
NHK 出版編（2013）『田中一村作品集 増補改訂版』NHK 出版
世良利和（2008）『沖縄映画大全』ボーダーインク

■資料：「新日本風土記 奄美」のストーリー展開

展開その1：導入部～平家の落人伝説から民俗文化のクリップとショチョガマ

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
導入部	奄美の海と山・道路 そして大島海峡とヒカ ゲヘゴ	ナ：風の中に、土の臭いに、もう一度 にっぽんを見つける。私を見つ ける。 テ：新日本風土記
	森に分け入る・洞窟 男性島人の語り 平有盛の言い伝えの墓 男性島人の語り ナ：女性	ナ：深い森の奥にそれはありました。 島人男：こっちじゃ。 ナ：樹木に覆われた洞窟 島人男：ちゃんと上にきれいにでかい石 が載っているでしょう。 テ：ちゃんと上にきれいにでかい石 が乗っているでしょう。 ナ：戦に敗れた平家の落人が隠れ住 んでいたとか。 島人：ホラ貝とか刀があったとか。 テ：ほら貝と昔の刀が置いてあった みたい。 ナ：落人たちは島に文化を伝えたとい います。 島人：読み書きを教えたのは大和から 来た夫婦、学問の始まりは有盛 が始めたんじゃないかなとわれ われは受け取っているんですけ どね。 テ：読み書きを教えたのは大和から 来た夫婦
	大島海峡 テーマ曲 ◎島の禱り・唄がある 生活の短いクリップ集 祭・ユタ・ヒカゲヘ ゴ・海峡・ショチョガ マ・古い衣装の虫干 し・先祖へのお供え・	ナ：不思議な言い伝えが残る島こ こは奄美大島。 テ：奄美大島 ナ：九州からも沖縄からもそれぞれ 350 キロほど。 ナ：海に隔てられた場所には今も 神様がたくさんいます。 ナ：島をおおう太古の森は東洋の

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	朝崎郁恵・老人達の島唄 とうがンを自転車の女性にあげる男性	ガラパゴスの名も。 ナ：厳しい自然を前に、人々は力をあわせなければ生きていけませんでした。 ナ：年に一度、遠い先祖の着物を虫干しします。 島人：どなたが着けたかわかりませんが、何百年ですね。 テ：どなたが着けたかわからないけど何百年でしょうね もう。 ナ：暮らしの礎を築いてくれた先祖に思いをはせて。 ナ：島にかかせない禱り。 ナ：そして唄。 島人男：やっぱやあ、歌で元気になって、元気の秘訣は歌ど。 テ：歌で元気になった テ：元気の秘けつは歌ど ナ：心があたたかくなる風景が溢れる島。 ナ：南の海の別天地に、ようこそ。
タイトル部 ※新日本風土記共通のタイトル部	朝崎郁恵の唄 ゆふあがり 最後のシーンは、ヒカゲヘゴと大島海峡	日本人の記憶 一瞬の夢 千年の美 旅 愛 故郷 未来へ 奄美

展開その２：「島の豊作祈願」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
ショチョガマ	空撮による大島海峡と 加計呂麻島	ナ：周囲 460 キロ。日本の島のなか で佐渡島に次ぐ大きさの奄美大 島。
	ショチョガマの準備 秋名地区の位置図	ナ：その 2 割りほどの平地に 150 あ まりの集落が点在します。 ナ：入り江に築かれたそれぞれの集 落に 独特の風習 が残されてき ました。
	ショチョガマの準備作 業シーンと島人たちの 会話	テ：島の豊作祈願 テ：秋名/龍郷町 ナ：100 世帯ほどが暮らす秋名地区 に伝わる豊作の儀式。秋のはじ め男たちが山で切り出したたん さんの丸太を運んでいました。 集落を見下ろす高台に、ショ チョガマと呼ばれるやぐらをつ くります。儀式がおこなわれる のは、旧暦 8 月最初の丙の日。
		ナ：奄美では古い行島は、今も 旧 暦 でおこないます。 ナ：今年とれた稲わらをやぐらの上 に。 ナ：この夏も幾度もやってきた台風 や病害虫に悩まされながら育て てきました。 ナ：山がちの奄美、田んぼをつくれ るほどの平地は、150 の集落の うち、今は四つしかありません。
	島の男性の語り	島人男：あちらに入ってきたらわかるん ですけど、田んぼの時期、稲刈 りときその時期はここだけ臭い が違うんですよ。稲穂の臭いが プーンとしてきますんで。稲穂 の独特の臭いですよね。落ち着 きますよね。妙に落ち着くとい うか

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	お供えを準備する着物姿の女性 島の女性の語り 平瀬マンカイ	ナ：女性たちは浜辺で準備。お供えする赤飯はサンゴで挟みます。 島人女：海の彼方の神様にだと思うんですけど、今年のお初米をあげます。 テ：海のかなたの神様にだと思うんですけど 今年のお初米をあげます ナ：奄美ではお米は南からやってきたと伝えられています。 ナ：サンゴは南の海への感謝の印。 ナ：クビから下げた数珠はお米にみたてたもの。 島人女：川のふちにこれの実がたんさんなるんですよ。これの実がなるようにお米が実りますように。 テ：これの実がなるようにお米が実りますように ナ：海の彼方から神様をお招きします。 ナ：この岩に上れるのは年に一度だけ。
	ショチョガマのクライマックス 六調踊り	ナ：夜明け前、男達がショチョガマに集まります。 テ：西東からの稲霊を招き寄せろ ナ：山の向こうにも居る稲の神様を呼び寄せます。 ナ：ショチョガマを揺らし始めました。 ナ：豊かな稲でゆれる稲穂を表します。 ナ：稲穂が倒れるほどの実りを願い、息をあわせます。 ナ：これで豊作まちがいなし。 ナ：山と海、両方の神様に力をあわせていただかないと稲は実りません。南の島の教えです。

展開その3：「小さな島のラジオ局」…あまみエフエムと島ことば

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
あまみエフエム	永田町市場遠景 エフエムのスタジオ パーソナリティ渡さん ナ：男性	テ：名瀬/奄美市 ナ：あまみの中心地、名瀬にある小さな市場の人気もの。 島人女：ラジオの方ですね 渡さん 聞いてます。 島人渡さん：出てください 赤ちゃん産まれたら みんな「産まれた」って言いにくるよ。 ナ：ここは島人による島人のためのラジオ局。地元の若者がはじめて8年になります。向かいには魚屋さん。なんでも放送のネタに。 島人渡さん：おばちゃんとともに魚を買いに来る客に、…マイクをこうやってもってきた聞いたりとか。いろんな人が出てくる島ラジオをめざして。今日もまた来たら出てもらおうかいと思っています。
	島口ニュース スタジオでの収録風景 スタジオの張り紙 「うがみんしょらん」 「ありがっさまりょうた」	ナ：一週間の島の出来事を紹介するニュース番組。伝えるのは、近所のお団子屋に郵便局の人。原稿も自分で書きます。 放送中のおしゃべり 島口での放送 ナ：放送で使うのは、奄美の方言、島口。たとえば、子供達が郷土芸能を披露したニュースは、こんな具合。 テ：(方言で歌うことが難しかったですが一生懸命みんなで覚えて) テ：(集落の皆さんに喜んでいただき とても嬉しかったと感想を述べました) テ：(という話題でした) ナ：ラジオ放送を始めた理由の1つは。失われつつある 島口の魅力 を伝えることにあります。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
		ナ：奄美では、本土復帰後、子供たちが方言を使うことを、昭和40年代まで、多くの小中学校で禁じていました。 島人渡さん：ここから道が狭い。 ナ：あまみエフエムのパーソナリティ、渡さん。週に3日は取材にでかけます。 ナ：訪ねたのは、町から1時間ほど離れたところに住むおばあさん。 島人渡さん：洗濯物ここに干してます。(笑)。石で押さえて、自然乾燥ですね。 テ：中原フデ子 (93) ナ：渡さんがいろいろお世話になっている中原フデ子さん。ところがこの日、フデ子さんが出かけている間に、娘さんが、車の出入れに不便な木を切ってしまいました。 島人フデ子：こんなにまで切ってしまって。悔しいよ。台風がくるじゃんか。この木は宝。 テ：こんなにまで切ってしまって(悔しいよ)台風がくるじゃが。 ナ：なくなった夫が台風から家を守るために植えた木です。 島人フデ子：この木は宝。風が来るぞ。大風が。あら雨、雨ぞ。雨じゃありゃ大雨。うちに入りなさい。 テ：風が来るぞ 大風が あら雨 雨ぞ テ：雨じゃありゃ 大雨 ナ：向かいの山が白くなれば、まもなく雨が来る相図。 島人フデ子：宝ど。天気のおかげで乾いた太陽の力。(太陽のおかげ)(尊いことだよ)…島口会話… テ：宝ど 宝じゃや テ：天気のおかげで乾いた太陽の力 テ：(太陽様のおかげ)(尊いことだよ)

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	渡さんとのやりとり	ナ：渡さんは、週に1度の番組でふでさんの暮らしぶりを取りあげてきました。 島口のやりとり テ：お子さんは何人ですか？ ナ：このままでは忘れられてしまう奄美 伝統の暮らし。 フデ子：84歳まで大島紬織ったど。 テ：84歳まで大島紬織ったど 島人フデ子：大島紬ぬ おさ打ち習たんや。あんまが うかげ テ：大島紬ぬおさ打ち習たんや（大島紬の織り方を教えてくれたのは）あんまがうかげ（お母さんのおかげ） 島人フデ子：これが私のおかさん。 島人渡さん：きゅらむん。 テ：きよらむん（キレイ） フデ子：毎日ありがとうと言うよ。 ナ：1人ぐらしのフデ子さんは、今も小さな畑を守っています。 島人フデ子：取れ、陽子、取れ。 テ：取れ 陽子 取れ ナ：フデ子さんの好物、ハンダマ（水前寺菜）という野菜。 島人フデ子：これが私を助ける。ご汁なんてい玉子けーてい。 島人渡さん：こんな風に笑って過ごされて、泣いたり笑ったりしながら、でもいま、こうやって。踊りを楽しんでいらっしゃるという姿がかっこいいし。また 昔のような島が、過ごし方がいいんじゃないかなと思って、大好きなおばです。ね、おばあ。 ナ：今日もこうした過ぎていく1日。
	笑って踊るフデ子	

展開その4：「日本一土俵の多い島」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素・文字的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
相撲	子供達がまわしをつける 子供の相撲練習	ナ：島の人達の楽しみはお相撲。なんと150の集落すべての土俵があります。 ナ：日本一土俵が多い島。まわしをつけるのもおてのもの。 島人男：なんとなく覚えて、あとはいろんな先輩に教えてもらったり、思い出しながら。 ナ：正月にお盆。四季折々人が集まる行事があると必ずつきものなのが相撲。まわしと土俵があれば誰でもどこでも楽しめます。 テ：日本一土俵が多い島
	浦上青年団が相撲大会の準備 紅白のまわし作り 青年団と壮年団の会話 ナレーター：女性	ナ：奄美の中心部名瀬に近い浦上地区は、人口1000人ほどの集落。秋の一大イベント、豊年相撲大会を控えています。 ナ：大会の目玉は、今年産まれた赤ちゃんのお披露目。そのために紅白のまわしを新調します。つくるのは、高校生から35歳までの青年団。奄美ではこの青年団が中心となってすべての行事をしきります。 島人男：これを始めたのは、この先輩からの代から。 島人男：おかげで毎年つくらないといけないという仕事が…(笑)。なんで? おもてなしのところで。 ナ：この紅白のまわし。30年前の青年団が子供の誕生をみんなで祝福しようとはじめました。毎年新しく作りなおします。 ナ：まわしの作り方を教えるのは

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素・文字的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
		壮年団。青年団の先輩、35歳から49歳までの人たちです。 青年団と壮年団の会話 島人男：いい思い。いやな経験も含めて、みんな鍛えられて…。 島人男：経験値がすごいから。 ナ：青年団をもりたてる壮年団。さらにその上、50歳以上は五十代会（いそよかい）。経験豊富ないそよ会の面々が縁の下の力持ちとして支えます。 テ：五十代会 島人男：教育受けながら、若い頃からずっと継いできて、後輩達が育っていくわけですよ。私たちは先輩から教わったとおり後輩に教えているわけです。われわれが教わったようなことすると逃げますよ。…厳しかったあ(笑)
	相撲大会当日 あかちゃんの土俵入り	ナ：相撲大会当日。参加するのは総勢70人のマメ力士たち。 ナ：お年寄りの特等席へ。こちらは60歳以上、若返り会のみなさん。マメ力士たちのガチンコ勝負を楽しみました。 テ：若返り会 ナ：そしてあかちゃんのお披露目。この集落に暮らす全ての世代に見守られて土俵入りです。
松たか子語り	六調踊 八月踊り 青パパイヤを穫る男性 田検のバス停	ナ：いのち敬い、うた唄い、出会い喜ぶ奄美妻。 テ：声 松たか子 ナ：あたりまえの日常が、ジャグリティに濃密だった。 テ：新日本風土記

展開その 5 : 「南の島の源平合戦」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
源平合戦	大島海峡 諸鈍しばや ナレーション：男性	テ：加計呂麻島 ナ：奄美大島の南西のある加計呂麻島。手つかずの自然が残ることで知られています。古くから神やどる島と呼ばれてきました。木をむやみに切ると神様が災いをもたらすとされ木材業者による伐採もこれまでありません。道端の石や木にさえ神を見出してきた島。歴史上の実在の人物も神になっています。激しく争った源氏と平家ゆかりの人々。 テ：南の島の源平合戦 テ：諸鈍 ナ：平家の落人伝説が伝わるのは、島の東側にある集落、諸鈍。ここには、いまから 800 年前、壇ノ浦の戦いで敗れた平の清盛の孫、資盛が祭られています。 テ：平資盛の墓 大屯神社 ナ：資盛がこの島に落ち延びたという確かな記録があるわけではありません。しかし。 島人女：資盛さんは島の人を楽しませて、漁をするのにすごいなんか画期的な道具、漁師さんがやりやすくなる道具も作られたという話を聞いて、だからすごい島の人に愛されて、大事にされた。 テ：資盛さんは島の人を楽しませて漁をするのに画期的な道具も作られた テ：島の人に愛されて大事にされた

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	ミキづくり	ナ：旧暦の九月、神社に人が集まっていた。特別な白いさつまいも。これで資盛にささげるおみきをつくります。 ナ：気温が高く酒造りに適さない土地。お米をサツマイモで発酵させる奄美独特のおみきです。二晩ねかせるとできあがり。資盛が始めたという芝居の日にあいます。
	実久 実久三次郎を祭る踊り	ナ：一方、源氏の伝説が残るのは、島の反対側、西の端にある実久。13世帯の小さな集落です。奉られているのは、南の島をわたり歩いた武勇伝をもつ源為朝の子、実久三次郎。 島人女：朝晩ここ通りますよ～。やっぱ、手が出ますものね。だから自分の子たちも、孫もそうなんですけど、やっぱり朝夕通ると手を合わせで頭が下がります。ここきたら。はい。それくらい気持ちを込めてますので、やっぱりありがたいという気持ちですかね。 ナ：集落の中程には、三次郎誕生の場所も、神屋敷とよばれる神聖な場所です。 ナ：源氏と平家を祭る2つの村、その神事は、同じ長陽の節句の同じ時刻にとり行われます。まるで、南の島の源平合戦。 ナ：源氏を氏神とする実久では、武者姿の勇壮な舞を奉納します。
	諸鈍芝や てんてん踊り	ナ：そのころ平家をまつる諸鈍では テ：諸鈍（大屯神社）

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	石垣から来た家族	ナ：芝居の登場人物は、島に古くから伝わる仮面と紋付き羽織という姿。一見ふつりあいないで立ちは、都の文化を身にまとった資盛が島の人々と交流するなかで生まれたといわれます。 ナ：毎年祭りの日に、石垣島からやってくる家族がいます。不思議なことにふたつの村、両方に顔を出します。 石垣の女性：なんだからっていったら、うちの主人のかたは、源氏の方なんですよ。私は平家の方で。こっちに来て戦争しないということ言われたので、あ～そうですかと言って、それから、主人連れて向こうも拝みに行ったんですよ。 テ：こっちに来て戦争をしないということ言われたので テ：なんだからって言ったらうちの主人の方（先祖）は源氏の方なんですよ 私は平家の方で ナ：源氏と平家をともに受け入れた奄美。神宿る南の島で、いまは両軍勝負なし。

展開その6：「山は恩人」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
蘇鉄地獄	西阿室の川 鰻とそれを見る島人 ナレーション：女性	島人男：出て来い出て来い 大ウナギ よ。 テ：出て来い 出て来い 大ウナギ よ ナ：同じ加計呂麻島、こんな小さな川にうなぎが。 島人の語り ナ：とって食べるわけではありません。あくまで観賞用。
	蘇鉄の切り出し	ナ：92歳の福島浦隆さんは村の生き字引です。 テ：福島浦隆さん (92) ナ：集落を囲む山は、神山とよばれる 神聖な場所。人々はこの山を恩人とも呼んできました。 ナ：福島さんがむかったのは、海に面した急斜面。お目当てはこれ ソテツ。南西諸島に多く自生し、やせた土地につよい常緑樹です 島人男：若い蘇鉄があればなお良かったのにな。こんなのが一番いいこれで大きいのな。 テ：ソテツ まだ若い ソテツ があれば なお良かったのにな 島人男：こんなのが一番いいですよ。これで大きいのね。 テ：こんなのが一番いい これ大きいね ナ：この蘇鉄を福島さんが切り出したのは、食べるため。 島人：終戦後はこればかりよ この餅ばかり。他にごちそうないもん、ソテツ の餅ばかりよ。一つずつ。 ナ：終戦後はこればかりよ この餅ばかり 他にごちそうないもん ソテツ の餅ばかりよ一つずつ。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
		ナ：終戦から八年間奄美はアメリカの統治下におかれました。パスポートなしでは島を出られず、本土との物資の流通も滞り、激しい食料不足が襲います。人々が生き延びたのはこの ソテツ のおかげでした。 ナ：食用になるのは、日当たりの良い急斜面で育った ソテツ 足場が悪く、切り出すだけでも大変です。 島人男：昔の人は偉いです。 テ：昔の人は偉いです 島人男：芋を植えたって3ヶ月たたと実がならんでしょう。その間、これ食べんば。 テ：芋を植えたって3カ月たたと実がならんでしょう その間これ食べんば 島人：命の つながり 奄美の人はねそれで不自由しなかったよね、腹一杯食べて。 テ：命のつながり 奄美の人はね それで不自由しなかったよね ナ：蘇鉄には毒が含まれています。天火乾燥とあく抜きを2ヶ月繰り返しデンプン質を取り出します。
	ソテツ粥づくり 「南島雑話」の挿絵 ソテツ粥を食べる	島人女：ねえ、なにしているの。 島人男：これ？ いまから食べるのよ。 島人女：食べたことないよ、わたし。初めて見た。 ナ：地元の郵便局に勤める禰広哲さん。奄美の食文化を残すため福島さんに学んでいます。 島人男：なるべく黒いのを落とした方がよい。土が中に入っているからセンが黒くなる。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
		テ：土の中に入っているから セン (でんぷん) が黒くなる 島人禰さん：まだ素人だ。 テ：まだ素人だ ナ：ソテツ からとれるデンプン質 はごくわずか。これだけ集める のに 10 本以上ソテツが必要で す。 ナ：奄美の人々を救った ソテツ。 実は、江戸時代は島民の主食で した。当時奄美を治めていた薩 摩藩はサトウキビを年貢に定め 厳しくとりたてました。食料の 芋を植えていた農地までサトウ キビ畑に変えなければならず、 人々は ソテツ を食べるしかあ りませんでした。 島人禰りさん：いただきます。まったく味がし ない。 島人女：なにか練りようかんを薄くした ような感じ、甘味のない。 ナ：苦難の歴史 が刻まれた ソテツ の森です。

展開その 7 : 「大島紬」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
大島紬	大島紬の龍郷柄 本土復帰直後の昔の紬織りの映像 音楽：黒人霊歌ゴスペル	テ：奄美の風土 から生まれた大島紬 テ：染料は山に自生するテーチ木の幹や根 テ：染めた絹を鉄分の多い泥につけ独特の黒を生み出す テ：「本土復帰」直後の奄美 昭和 28 年ころの奄美 テ：主要産業に乏しい島で島民の生活を支えた テ：養蚕 泥染め 機織りは分業で行われてきた テ：いま 日本を代表する絹織物

展開その 8 : 「放浪の唄者」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
里国隆の 思い出	自由人盛島の紹介 ナレーション：男性	ナ：その人は自分で建てた小さな小屋に住んでいました。奄美ではちょっと、いやかなり有名な自由人。 テ：盛島貴男 (65) 島人盛島：あっさりしてるだろ。これ以上ぼくはきれいくできん。限界ぎりぎりいっぱい (笑) ナ：犬や猫と三畳の寝床。人里離れた小屋で気ままな 1 人暮らしです。
	家の裏の音楽スタジオ	テ：屋入 龍郷町 ナ：敷地にはお手製の音楽スタジオが。 島人盛島：ここは舞台な。ここはもう恥ずかしい舞台だから。 ナ：誰でも自由に使えるようにとつくりました。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
		島人盛島：1日使用しようが、1時間使用しようが、勝手にあっちに名前かいて、千円いれればいいわけ。料金箱に。自分で書いて…。金もうけとかそんなこと考えないわけ。頭の中にないわけ、楽しむ世界や。
	琴づくり	ナ：盛島さんは、しいたけ栽培のかたわら、楽器を作って売っています。
	里国隆の思い出	島人盛島：…全部見せるからや。 ナ：あらわれたのは 琴 。大きさは通常の半分ほど。かつて盛島さんがあこがれていた人が使っていた 特別な琴 です。
	里国隆の写真	島人盛島：この楽器自体、はっきりいってあまり日本全国どこでもない楽器だから。ひろめるため、いっぱいつくっているいろいろ研究したのよ。
	琴による島唄の演奏	ナ：琴を使っていたのは、放浪の唄者といわれた 里国隆。路上で琴をかなで樟脳を売る 盲目の唄者です。 ナ：貧しさや苦しさ、弱き者に寄りそう唄でした。 ナ：国隆は専用の爪がなくても誰でも弾けるように琴を改良。盛島さんはその複製をつくり国隆の琴を広めようとしています。 島人盛島：音の調弦がしにくいときには、こういうのを使って音を緩めたりするわけ…。市販されているステンのボルト(笑)安上がり(笑)これで音程がきれいできましたから。 ナ：盛島さんが国隆と出会ったのは小学生のころ。 テ：唄：よいすら節 奄美民謡 詞里国隆

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
		ナ：路上で唄う姿が幼心に焼きついています。 テ：別れてど 行きゆり（これから別れて行くけれど） テ：ぬが形見持たそ（なんの形見を持たせてあげようか） 島人盛島：すらよいの唄。 テ：あせはだぬ 手ぬげ（汗のついた手拭い） ナ：島に仕事がなく十代で家を出た盛島さん。表具職人や料理人、トラックの運転手、にっぽん各地を転々としてます。そして50歳を前に突然琴作りと唄を始めました。 島人盛島：小学校6年生の時にしているから。あの人のものが、47、48のころに、なんというのかい、蘇ってきた。それでこれだったら、この音楽はもうボクにぴったしじゃないかと思ったですよ。 ナ：里国隆は東京でも人気を集めますが、晩年は 島に帰り 路上で唄いながら過ごしました。国隆が終生愛しつづけた奄美。
	お金と貧乏についての島人盛島の語り	島人盛島：もともと奄美には土農工商とか立派や役割がないわけよ。みんな平民ちょ、だから助け合う精神が旺盛で、みんなで苦勞をわかち合う から、それが強いんじゃない。 自分1人 貧乏 なら頭くるよ。いや〜、そのへんも貧乏だからいい話よ。自分なんか小さい頃ほとんど 貧乏 したるわけや。かえって金持ちしとる人が恐縮しとるわけ。 貧乏 人が多いから。貧乏人がみんな元気っちょ。金なんかいらん（笑）、飯さえ食えたらいいっち感覚や。ん〜。

展開その9：「島唄の心」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
島唄と朝 崎郁恵さ ん	マングローブの森 ナレーション：女性 テーマ曲「ゆふあがり」 籠網の作業風景 ソテツ作業風景 アダン越しの海 朝崎郁恵さん 朝崎さんが花富を歩く 朝崎さんの父の写真	ナ：心 ふるわす 唄のふるさと 奄美。 ナ：新日本風土記のテーマ曲もこ こで生まれました。 テ：♪あはがり テ：浮き世 仮島に（この世は神様 からいただいた仮の世） テ：何時がでいむ 居らりゆむい（い つまで とどまって居られま しょうか） テ：情けあれいよ 加那（命を敬い 生きていなさい） テ：くぬ世ば うさむいれいがでい （この世の生を終えるまで） ナ：この唄を唄っているのは奄美出 身の朝崎郁恵さん。 テ：朝崎郁恵（79） ナ：古い歌詞をいくつもくみあわ せ、島人の心を託しました。 テ：島人の心 ナ：朝崎さんは加計呂麻島花富の生 まれ。15歳まで暮らしました。 テ：花富/加計呂麻島 朝崎：私が住んで産まれて育ったとこ です。これ。ここ。 ナ：父は鍼灸師、母は蚕を育ててい ました。貧しいながら、家には いつも唄がありました。 朝崎：私の家は、父親が三味線を弾 いて、いつも三味線の音が聞こ えてね。くるんです。遊びに行っ て帰ってくると、まだ弾いてい る、まだやっている。そういう 環境で育ちましたから。 ナ：父は地元では知られた唄の名 手。朝崎さんは幼い頃から沢山 の唄を教えられました。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	浜辺での幼なじみたちとの再会 父が作った嘉義丸の歌 朝崎さんと幼なじみとの交流	ナ：そのころの幼なじみが今も島で暮らしています。 島人の会話 ナ：朝崎さんの父がつくった唄を覚えている人がいました。 テ：嘉義丸の歌 詞・曲 朝崎辰如 ナ：この唄は、戦争中。多くの民間人を乗せた船がアメリカ軍に撃沈された悲劇を伝えたもの。当時、国が伏せた事件を朝崎さんの父は歌にして密かに残しました。 嘉義丸の唄 島人男：この人たちの時代なら お父さんとね～、後の人は全然わからんからね～。 テ：この人たちの時代ならお父さんと（交流）しているから 後の人（世代）は全然わからん 島人女：そう思って「嘉義丸の歌」も私なんかが歌える間と思って。テープなんかに入れて、吹き込んで 知らない人にあげたりして。 テ：そう思って「嘉義丸の歌」も私が歌える間と思って テープに吹き込んで知らない人にあげたりして ナ：受け継がれていく歌の記憶。父の思い出。 朝崎さん：花富でね、生まれて、育ったことが誇りに思います。ここで…でよかったと思います。
	朝崎さんと諸鈍の浜での島人の島唄の唄のかけあい（朝花節）	ナ：奄美ではいまも 暮らしの中に 唄が溶け込んでいます。人が 集まれば必ず唄が。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	浜辺で祈る朝崎郁恵さん	ナ：何気ないやりとりも唄に。 島人男の島唄と朝崎さんの島唄のかけあい テ：命長むていりば（長生きさえしていれば） 拝まんちゅむ 拝でいしりゅり（初めてお会いする人でも 分かり合える） テ：なていかしゃみくいぐあ ちょうなま拝でい（懐かしい美声を今日初めて聞きました） ナ：唄い始めの人の言葉を次の人が繋ぐ唄のかけあい。あいさつ唄です。 ナ：島唄はさまざま。百曲ほどのメロディと千を超える歌詞が伝えられてきました。 島人男：もともとの島唄の唄い方は掛け合いが、ほんとの唄い方じゃないでしょうかね～。 島人男：その人その人、独特の唄い方がある。10人あったら10人、同じ節じゃない。みんな節が変わって行く。たいがい。 島人男：しゃみの弾き方から変わる。全部（笑） ナ：貧しくて読み書きの出来ない人も、唄を通して心を伝えました。薩摩の役人に聞かれたくないことは唄にのせ密かに伝えました。 朝崎：唄の背景に、この奄美の歴史があるんです。いいかげんな唄い方をしたりは絶対しちゃいけないって。大事に、私たち奄美のご先祖さまが、親から子、子から孫へと残してくれた、遺言ですよ。 ナ：だれが、何時作ったのかもわからない無数の唄が、今も人の心をつなぎます。

展開その 9 : 「近所の “生き神様”」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
ユタ神様	ユタ神の栄サカエさんが、鶏飯をつくっている ナレーション：男性	ナ　：こちらのおたく、お昼の支度の真っ最中。 ユタ神：あっ、しいたけ入れるの忘れた。 ナ　：奄美の郷土料理、鶏飯です。具をのせたご飯に鶏のスープをかけるもてなし料理です。 テ　：鶏飯 ユタ神：あなたもっていつてくれる？ ナ　：具をのせたごはんに鶏のスープをかけるもてなし料理です。 ユタ神：私しいたけ探してもってくるから。もう探さんとわからない。 はい、ほんと、ほんと。はい、どうぞ。 テ　：栄サカエさん
	ユタ神様とお客さま	ナ　：ごちそうをつくってくれたこの方。ただの人ではありません。 島人女：ごめんください。おじゃまします。 ナ　：この家には電話と来客がひっきりなし。 ナ　：家の真ん中には、天照大神をまつた大きな祭壇が。実は、栄さんは島に数人しかいないユタ神様。死者の言葉を伝える霊能者と信じられています。 テ　：ユタ神様 ナ　：この人は年に数回、なき夫の声を聞きに来ます。栄さんから言葉がでてくるのをじっと待ちます。ユタ神様は時々、意外なことをおっしゃいます。 ユタ神：感謝というのがこれからくるんで、その気持ちをよくいただいてください。で、もうひとつ、お墓は、今日が今日じゃなくして、いつでも、自分たちの手のひらにお金に乗った時に、お墓は考えれと。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
		テ：お墓は今日が今日じゃなくして いつでも自分たちの手のひらに お金が乗った時に考えれと 島人女：ふ～ん、そうですか。私が考 えてるのを、ちゃんとわかってる んだ。私、しようと思ってたん です。 テ：私が考えてるの ちゃんとわ かってるんだ テ：私 しようと思ってたんです ユタ神：もうしなくていいって。 ナ：お礼は3000円。それにお供え 用の塩と酒。 ナ：島の人たちが頼りにする 身近 な神様 です。 島人女：友達美容室で初めてお会いし たんですよ。それがご縁で、あ のさしていただいております。 ユタ神：おもしろいでしょう。 島人女：それが縁でしょうね。ずっと助 けていただいた。 ユタ神：おもしろいよね。
	ユタ神様のみそぎ場所	ナ：近く of 山に栄さんがみそぎをし るところがあります。 ナ：七つの山の水がいっしょになる この場所で、ふた月に1度身を 清めます。 ユタ神：神が息づいている というのは 自然があまり壊されて、よごさ れてないということよ。根づい ているということは。ね。それ だけいろいろなものを手で加え て、壊されてないというこ とよ。うん。だから 神高い と いうのもこの場所があるから。 ナ：神高い とは、奄美の言葉で神 がすぐそばにいること ナ：確かに 神様 が過ごしやすそう な森と海です。

展開その 10：「ご先祖さまがやってくる」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
先祖供養	一日と十五日のお供え サトウキビを切り お供えの料理づくり 稲わらでのひしゃくと 箸づくり お供えを置く	テ：村田裕子さん 島人村田さん：一日、十五日かならずお墓参りするんですよ。ここは。旧暦の一日、十五日。 ナ：亡き人を身近に感じてきた島人たち。奄美には、お盆とは別に、はるか昔の先祖を迎える風習があります。 ナ：お供え物の一つがさとうきび。江戸時代厳しい年貢のとりたてに先祖が苦しんだ作物です 島人村田さん：これだけがいるんですよ。3本。 ナ：この日は大勢のご先祖様が1度きにやってきます。 山盛りが好きらしいですよ。 ナ：料理だけではありません。 ナ：稲藁を使ってつくるのは。 島人村田さん：ひしゃくと箸。 ナ：ご先祖さまが水を飲むひしゃくとごちそうをいただく箸。 島人村田さん：上手にできないんですけどね。…この日だけです。 ナ：出来上がったお供え物は仏壇ではなく、玄関先へ。おいでになったらすぐに召し上がっていただくためとか。準備万端ととのったら、お線香でお知らせします。 島人村田さん：3本ずつの3回お供えするんですよ。これが消えたらまたお帰りになるそうです。 テ：これが消えたらまたお帰りになるそうです ナ：はるか昔の先祖の迎え方は集落によってさまざま。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	阿室の土俵を囲んでの先祖を迎える夜明け前の踊り 古い衣装の天日干し	テ：阿室/宇検村 地図 ナ：奄美の西の端では、夜明け前から賑やかに唄と踊りで迎えます。 ナ：準備しておくものがあります。 島人の会話 ナ：ご先祖が身につけていたもの。虫干しする習わしです。 島人森山さん：先祖代々からの、ん～あれを、こうして…大事にしなあかんよてい。 テ：森山タツエ (88) 島人森山さん：その時からやぶれをきいているんだけど・・ばあさんなんかがそう言ってあるから…。 島人女：何百年だろうね。わからないです。 テ：何百年だろうね わからないですもんね ナ：芭蕉府の野良着や儀式の衣装。いつだれが着たのかわかりませんが、この日のためにだけに一年しまっておきます。 島人会話：毎年、、ぼろぼろになって。 島人森山さん：腐らさんため。天日で干して 大事にしておけちゅ…。 テ：腐らないように天日干しして大事にしておけと言われた ナ：すれ切れ、色あせた布地が神々しく見える島の1日です。

展開その 11 : 「月あかりの下で」

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
小港地区 の十五夜 祭り	小学生の稲刈り ナレーター：女性	テ　：小湊/奄美市 ナ　：子供達が田んぼに向かいます。 全校生徒 11 人の小学校。 自分たちで育てた稲が、実りの 時をむかえました。 この田んぼ、昔はたべるため にお米をつくっていましたが、今 は、村の神事のため。まもなく 十五夜。この稲で お月様を 迎えるのです。 島人会話 島人　：米粒一つに 神様が二人住んで いるんだって。 島人女：大事だよ。大事。 ナ　　：稲には邪気を払う力があるとい います。子供達が育てた稲で 厄払いの綱をつくり、十五夜 の晩、海に流します ナ　　：昔は奄美のあちこちで行われ ていたこの 行事。今は、田ん ぼも少なくなって、この集落だ けになりました。
	縄づくり 雨模様の海 晴れを祈る男性	島人の会話 島人男：縄教えてもらっていいですか。 テ　　：縄教えてもらっていいですか 島人男：こうして手のひらでねじったら いい。 テ　　：左手を上を こうして手のひら でねじったらいい ナ　　：お年寄にとっては腕のみせど ころ。綱をよるわざといっしょ に、祈る心を教えます。 ナ　　：十五夜の日、あいにくの空模様 島人男：十五夜まつりがうまうまいきます ように。

展開 (コーナー)	映像的要素・音声的要素 (各シーン・音楽)	言語的要素 (ナ：ナレーション/テ：テロップ、島人：島の人の語り)
	子供達 十五夜祭りの夜	ナ：子供達が綱で集落をくまなく清め、お月様を清めます。 集落に災いが入り込まないよう、稲で四隅に結界をはります。 ナ：子供達の願いがとどいたのか、空には満月。月のあかりと稲の実りのありがたさ ナ：十五夜の海。邪気を払った稲の綱は、全てを清める奄美の海に消えていきます。
エンディング	エンディングテロップ テーマソング	

ナ：ナレーション、テ：テロップ

